戦闘士クーガ

狂狗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
戦闘士クーガ

【Ｎコード】
Ｎ７３０２Ｈ

【作者名】
狂狗

【あらすじ】
オレの名前は久我朱彦、クーガ・グリムゾンと呼んでくれ。オレはとある世界で勇者をやっている。金色のピアスを付けた時から聞こえるようになった神の声、こいつのせいでオレは……ハァ。そこからオレの長い旅は始まった、勇者なんて序の口、いつもハイテンションで人の話を聞いちゃいない神の導きの元、果たしてオレはどこへ行ってしまうのか。あとな、オレは人とは違うところがある。勇者だとかそう言うのは関係なしに、決定的に違うところがあるんだ。あのピアスをつけた瞬間に知った、いや勝手に教えられた。オ

レは、自分が小説の主人公だと知っている。

1（前書き）

本来の話数が変わるタイミングは、タイトルが変わる時です。番号がふってありますが、それは一つの話を何等分かにしたものです。

前半はギャグまっしぐらですが、ラスト付近はシリアスになる予定です、ご注意ください。

あと、カオスです。

1

オレの名前は久我　朱彦、クーガ・グリムゾンと呼んでくれ。
オレはとある世界で勇者をやっている。
いわくつきの剣に伝説つきの鎧、そして市販品の盾を持ってウィクトリア姫を助けるために邪竜ファヴニルを倒す運命だ。いや、予定と言った方がいいかもしれない。オレにもライバルと呼べる存在は居たけれど、ついこの間敵に追われていたとき「ここはオレに任せて行きな！」と言い残して、死んでしまった。
親父に押し付けられた金色の片耳ピアス、このピアスをつけた日にオレの運命は決まったんだ。多分そのピアスの効果なんだろう、神の声が聞こえるようになったオレは、国から勇者とされた。

……おかしいだろ？

何でこんなにコテコテの勇者なんだよ、仲間がいないだけマシだけど、いたら絶対に僧侶と魔法使いと盗賊だぜ？それだけ典型的な勇者だって事だ。
普通に考えて、こんなに都合よく姫さまがさらわれるか？　ちょうどオレがピアスをつけた翌日にさらわれたんだ。
うっかり入ったダンジョンに伝説の装備か転がってるか？　地図を逆さまに持ってて、たどり着いたダンジョンの中にあったんだぞ。

そして、オレが一番納得行かないのはこのピアスなんだよ。
親父が誕生日プレゼントにくれたんだ、いらねぇって言ったのに無理やり押し付けられたんだ。どこで手に入れたのかわかりゃしない、うさんくせぇ。まぁとりあえずためしに付けてみるか、と思って軽い気持ちで付けてみたんだよ、綺麗だったしな。わざわざピアス穴開けちまったんだよな、ご苦労なこった昔の自分、なにが起こ

るかも知らないで。

あの時は本当にびっくりした、付けたとたんに、このピアスの異常性を理解した。

……怪しい笑い声が聞こえてきたんだ。

その笑い声の主こそオレが“神”って呼んでる存在で、オレをこき使ってる奴だ。正直どこが神様なんだって思う、ネーミングしたのはオレだが。すぐに外そうと思ったのに何やっても外れないんだよな、このピアス、こういう理不尽な事ができるところは神様らしいかもしれない。

あとな、オレは人とは違うところがある。

勇者だとかそう言うのは関係なしに、決定的に違うところがあるんだ。あのピアスをつけた瞬間に知った、いや勝手に教えられた。

オレは、

自分が小説の主人公だと知っている。

2

と言うわけで前説明終わり、オレは邪竜が住んでいると言われている洞窟の前にいる。どんな洞窟かと言うと、どう考えてもあり得ないサイズの洞窟だ、天然でこんなサイズの洞窟出来るわけないだろ。でもよく考えたら邪竜の住処なんだよな、邪竜が住みやすいように壁を崩して洞窟を大きくしたのかもしれない。

妙に地面が綺麗に均してあるし、密林の中にあるのに雑草も生えていない、どう考えても人の手が入ってる。と言ってもこんな洞窟の手入れをするのは邪竜しかいないわけで、つまり邪竜が地面を綺麗に均して雑草を抜いたことになる。

（いやまてよ、竜に草むしりができるのか？）

よくよく考えてみれば明らかにおかしい、竜がすごく小さいというなら別だけど普通に考えたらサイズ的にできない、草が摘まめるのか、無理だろう。ひょっとしたら火のブレスとかで雑草をことごとく燃やしているのかもしれない。そう思った矢先に、オレは洞窟の端に積んである物に気づいた。

丁寧に根っこまで抜いてある雑草が、これまた丁寧に、根っこの方向までそろえて積んであった。

（……あれだ、きっと人間の召使とかがいるに違いない。地面均したのもきっと人間だ、そこらへんの田舎道より綺麗に均してあるし、竜がこんな事するわけないよな？）

そんな事を考えていても仕方ないので、オレは邪竜のいる洞窟へ入っていった。入り口では何ともなかったのだが、洞窟に入ると強風がオレを襲った、すごく強い、しかも花粉が混ざっているらしく花粉症のオレにはつらい事この上ない、目がすごくかゆいし鼻水も出てきた。今は花粉の季節じゃないのに、なんでこんなに花粉が。あれか、まさか邪竜の策略か、邪竜がオレは花粉症だと知って、洞窟の中を花粉まみれに……

（……それは嫌だ、何かが終わってしまう、話が破綻する）
そんな事を考えながら、洞窟の中をひたすら進んでいくのだが、この洞窟本当に何もない。モンスターぐらい出るだろうと思い、剣を構えてこの強風の中を進んでいるのにもかかわらず、ネズミ一匹すらいない。こんな強風の中でわざわざ剣を構えているのだから。モンスターの一匹や二匹ぐらい出てきてくれ、この辛さを解ってくれよ、なんか空しいじゃないか。
「……誰かがサボってるんじゃないよな？」
やっと出てきた初台詞、なんと独り言。そりゃ相手がいないからな、さっきから人っ子一人出てきやしない。
そして、いつものように頭の中で響く声。
“うん、サボってるよ”
オレの声と少し似ている、ろくでもない事しか言わない声。
神の声。
「サボってるのはお前か！」
思わず立ちどまり、声に出して突っ込みを入れる。しかし神は聞いちゃいない。
“神様について説明します”
「自分に様つけんな」
“えーっとぉ、私は「」と『』と（）以外の台詞でしゃべります、多分。あとクーガの内心の台詞も、バリバリに聞いてる設定です、多分”
「多分ってなんだよ、あとさっきからオレの台詞スルーし過ぎだから！」
“スルー、それは世界の神秘”
いつもの事だ、いつもの事だ、いつもこんな感じなんだチクショー！　まともな会話にならねぇ！　一人旅だから話し相手は専らこいつだと言うのに、なんでこんな性格してんだこいつ。マイペースで唯我独尊でオタク！
“マイペースとオタクは否定しない、でも唯我独尊は否定させて

もらうぞクーガ！”
「マイペースとオタクは否定しないんだな」
“私はナンバー・ワンではなくオンリー・ワンだからだ！”
ほんと何時でも偉そうだなこいつ……。オレは鼻水をすすってから、足を前に進めた。
「はいはい勝手に言ってろ。で、俺は後どれだけこの花粉の中を歩けばいいんだ、正直もう耐えがたい」
“あとねぇ、一分ぐらい”
「もう目前なのかよ！」
“もうちょっとしたら眩いとこに出るよ、ほ～ら、もう目前”
神と呑気に会話をしていたら、神の言った通り、目の前から光がさしてきた、たいして歩いてもいないのに。暗闇に少し慣れた目には少々きつい明るさだ、目に痛い。オレはその光に向かって歩いていった。

3

光は近づくにつれ光量を増していき、オレの目も次第に光に慣れていった。出口までの道は坂道になっていき、オレはそれを登りきった。

（うわっ……凄い景色だ……）

そこは山の頂上だった、凄い高い、明らかにこんな高さを上ってこれるほど歩いていないのだけれど、今更なので気にしない。まさに風光明媚と言う言葉が似合う景色だ、でも崖なので少し危ない。足元には青々とした黄緑色の草が生えており、周りの木々も鮮やかな色で、美しい。

しかし、ひとつ気になる。背後から吹いてくる強風だ、正確には後ろ斜め上。妙に蛇行している風、洞窟に吹き込んでいた風と思われる強風だ。花粉が凄い含まれているらしく、さっきから鼻がムズムズして仕方ない。その強風の吹く先に何が居るのかは、話の展開的にわかるが、何でこんなに花粉が混ざった風なんだろう、わざとこんな風を起こしているとは思いたくない。わざとだったら……あれだよ、さっき考えてたオレの弱点をついて風を起こしている事になるからな。確かにオレはこの風のせいで鼻水ダラダラなうえに涙目になってるから、効果的面には違いないけれども、そんなせこい事をする相手が敵だと思いたくない。振り返れば真実はおのずと知れるのだが、振り返りたくない。いろんな意味で。

“振り返るのだ、話進まないから”

（……神ウゼェ）

“ウザくてけっこう、はよ振り返りんしゃい”

神の言う通りに動くのは癪だったが、確かに振り返る以外に道はなかった、帰る訳にもいかないし。オレはゆっくりと振り返った。

そこには、邪竜と呼ぶに相応しい存在が鎮座していた。

黒い鱗に覆われた巨体、人間など引っ掛かっただけで引き裂かれるであろう鋭く大きな鉤爪、天を突く四本の金色の角、禍々しいほどに赤い目を持った、邪竜ファヴニルが悪魔のような翼を激しくはためかせていた。

……あのいかにもな外見といい、この威圧感といい、それらはあの竜が本物の邪竜だと示している。しかし、あれだ、やっぱりこの強風起こしてるのはあの邪竜なんだよな？　しかも、わざわざオレの出てきた洞窟の上に生えている杉の周りで、バサバサやってんだよな、ついでに言うと、なんか羽ばたき過ぎて疲れた顔してるんだよな。邪竜にあえば、普通は腰が抜けるぐらい吃驚するんだろうけど、あんな風じゃなぁ……第一オレ一応勇者だし、勇ましい者だし。吃驚現象にはもう慣れたよ。

（……何やってんだこいつ？　いくらなんでも間抜けすぎる、普通に偉そうに構えていてほしかった……）

内心で独り言をつぶやいてると、邪竜はオレがふりむいてからしばらくの間を置いて羽ばたくのを止めた。そしてオレを上から鋭い視線で見下ろし、低い唸り声をあげると。

「ようこんな遠くまで来なはったな、勇者はん」

「なんでそこで喋るんだよ！？　つーか何で京都弁？」

邪竜の鋭い牙が生えそろった明らかに人語を話せなさそうな口から飛び出してきたのは炎でも毒の息でもなく京言葉だ。テレパシーでも何でもなく普通に喋っている。いくらなんでもシュールだ、シュールにも程がある。叫んで突っ込む以外の行動が取れない。このまま戦闘に入るのかと、真面目に考えて剣を構え直したんだが、こいつはオレの期待をどれだけ裏切れば気が済むんだ。オレが唖然としているのにもお構いなく、邪竜は一人で話し始めた。

「いやぁ、ワイもこんな形でアンタとは会いとうなかったわ。どういう訳だか、ワイの評判はここ数百年の間に悪者って事になっとってな、昔はそうでもなかったんやで？　山の神様っちゅう事で、ちゃんと奉られてた頃もあったなぁ」

「大阪弁になってるぞ！？」
「地だけどなんか文句あるけ？」
「どこの方言だよ！」
「まぁそれは置いといておくんなはれ、ワイは別にそんなに悪者として暮らしてきたつもりはあらへん、今回姫さんをさらったのも訳あっての事や、どうか見逃してくれへんか？」
早いテンポの会話で突然そんな事を言われても、どうすればいいのか解るわけがない、と言うか邪竜がどういう仕組みで喋っているのかが気になって仕方ない。だいたい、事情があっての行動だと言われても、ここまで来るのにかかった道のりを考えると、そうあっさりと引き下がれない。しかしオレとしては戦う気が起きない。こんな事を言い出す異様にシュールな邪竜に対して、戦意と呼べるものはことごとく喪失していた。邪竜と戦うか否か決めかねていると、神の声がまた聞こえてきた。
“戦うのだクーガよ、戦え！　……くふふっ”
何やら威厳があるように見せたいらしくやけに低い声になっている、ちなみに威厳のかけらもない。一人で喋っているのは怪しいので、オレは心の中で返事をした。
（何で最後に意味ありげな笑いが入るんだろうなぁ？）
“いいから戦え、オチは出来ている”
（ますます戦意が喪失してきたのは気のせいではない、真実である）
“そんな解説っぽく言ったってねぇ、戦ってくれなきゃ”
（神の命令だろうとやる気は湧いてこない）
“ちぇ、じゃあ少しやる気が出るアドバイス。邪竜と話してて”
（なんだそりゃ……？）

4

オレがしばらく神と内心会話をしていると、怪訝に思ったのか邪竜が首を傾げていた、そんなデカイ頭傾げんな、ヘンだから。とりあえず神の命令によると、邪竜と話して居ろと言う訳なのだが、何を話せばいいのかがさっぱり解らない。そりゃあラスボスと世間話をしなさい、というのが無理だ、普通はほとんど話さない。

「どうなさった久我はん、えらいお困りのような顔しておりますよ？」

「久我じゃなくてクーガと呼んでくれ」

「はぁ……」

「……」

しまった。うっかりクセでどうでも言い事の訂正をしてしまった、いやどうでも言い訳ではないけど、どうでもいい訳ではないって事が悲しい。くそ……っ、さっきの話を頑張って引っ張れば、もう少し話を伸ばせたのに……っ！

（ちくしょう、どうしろってんだよ、答えろ神！）

“アイワズボーン、イントゥザアメリカ！”

聞いてねぇ、つーか英語間違ってるし。どうすればいいんだよ、ちくしょう。

“ハイッ質問、ヌシは何のためにここへ来たのでしょう？”

（ちゃんと聞いてんじゃねぇか）

“うるせー、考えやがれ”

こんな軽いノリで、しかもよく解らない口調で話されると、なんだか反抗して何も考えたくなくなる、でも考えなきゃ話が進まない……って神みたいなこと言ってるよ、オレ大丈夫か？

「オレは何のためにここに来たんだ……」

遠い目をしてつぶやく他なかった。遠い目をして空を仰ぎかけた時、視界に困った顔をした邪竜が飛び込んできた、そう言えばさっ

きから内心会話ばっかりやってたから、邪竜の事を完全に放置していた。
（やべ、怒ったかな？）
そう思った邪竜の顔をうかがったが、どうやらオレの挙動不振の方が気になるらしい、首を傾げてオレを見ている。だから首傾げんな、ヘンな気分になってくるんだよこの光景。オレはお前を倒しに来たんだよ、そんな子供みたいな顔するな、余計に戦意喪失してくる。
「そう言えば、オレはお前を倒しに来たんだった……」
ぼそり、とオレが呟くと邪竜はびっくりした顔をして目を瞬かせた、だから止めろそういう顔、ヘンだから。何か忘れている気がする、そうだ邪竜を倒す理由だ、何でか忘れてる……なんだっけ？
「……ってえ、姫様を助けに来たんだろうが！」
ついつい一人突っ込みをやってしまった、しかも大声で。そんなオレを邪竜がすっごい驚いた顔で見てる、あんぐりと口開いてる。こんな重大事項を忘れていた自分にびっくりだ、そして大声で叫んでしまった事にもびっくり、メチャクチャはずかしー。
「……あ……いや、その、あれだ、忘れてた訳じゃない、忘れてた訳じゃないんだぞ！」
どうしたらいいんだよオレ、恥ずかしくてこれ以上何も言えねぇよ、ツンデレみたいな台詞叫んじまった、絶対ツンデレとは別ものだが。邪竜もなんか困った顔してやがるし。オレがむちゃくちゃ困って頭を抱えていると、そんなオレを気遣ったのか、邪竜の方から口を開いた。
「ひ、姫さんならここにおりますよ？」
「どこだよ？」
「ワイの後ろにおりますえ」
そう言って、邪竜はその歩きにくそうな足で器用に歩き、もと居た立ち位置から少し横にずれた、すると邪竜の背後の風景が見え、そこにある物が見えた。薄桃色の美しいクリスタルだ、五角形のク

リスタルが地面につき刺さっている、せめて空中に浮かばせるぐらいの事はしてほしかった、解るかどうかは解らないけど、イメージ的にはファイ〇ルファンタジーではなくゼ〇ダの伝説で。
目を凝らすと、その中に人が入っている事が解った、よく見えないので、常備しているスコープを懐から取り出し、覗いてみた。

5

流れるような黒髪、小枝のように細い身体に、フリルをふんだんにあしらった深紅のドレスを身にまとっている。職人が魂を込めて創った人形のような顔、サクランボのように紅い唇、絹の肌、宝石のように美しいであろう眼は、今は長いまつげに彩られ閉ざされていた。

……平たく言えば、とんでもない美少女がクリスタルに閉じ込められていた。見蕩れるほどの……正直に言えば見とれていました、ハイ。健全な十八歳男児なんだから、別におかしい事じゃないだろ。

姫さまに見とれていると、邪竜が姫様を閉じ込めているクリスタルについての、解説を始めた。

「このクリスタルはワイが端正込めて作った物でな、水晶に見えるけど、本当はワイの創った特殊ガラスなんや。このガラスは魔法が込められてて、１０トンもの重さに耐えることができる。耐熱性も万全でプラスマイナス１千度まで耐えられる上、ちゃんと空気穴もあるで、すごいやろ！」

なんかクリスタルに関して胸を張って解説してくれたんだけど、なんか内容が微妙なんだよな、いや現実的に考えれば十分凄いんだけどケタが微妙なんだよな、小説として考えると……インパクトが。

「ちなみにワイを倒すまで開かへん」

「なんか困った設定がついてるぞ！？」

「そんなに変かえ？」

コテン、とか音のしそうな感じで首を傾げやがった。だからそれがおかしい、変なんだっつーの。くそ、いい加減に我慢の限界だ。

「もうおまえの存在が全部ヘンだよ、何で杉の周りでバサバサやってたんだよ！？」

「あ……それは……花粉症って聞いてな、あきらめて帰ってくれへんかなぁ～って。ちょっとしたお茶目」

「そのナリでお茶目とか言うな！」
“ほれ、もっと聞いたれ”
心で叫んでいるオレを神が煽る、別に神様の言う通りに動いている訳ではないけれど、せっかくだし。嫌でも聞くしかないだろ？
オレは邪竜を指さして、先ほどから気になっていた事を叫んだ。
「まさかとは思うが、この洞窟の異様な綺麗さ、お前がわざわざ整えた訳じゃないよな！？」
「ワイが毎日雑草抜いて床掃いとりまっせ！」
「なんなんだよおまえ！　それでも本当に邪竜か！？」
「周りからは勝手にそう呼ばれとるけど……」
「うるせぇ、もうおまえなんか邪竜じゃねぇ！」
「そう言われても……」
頭を抱えてしゃがみこんだオレを、心配そうに見つめる邪竜。やっぱりこんな奴のどこが邪竜なんだよ、どう見たってただの竜だろ、いや最早竜ですらないだろ。理解し難い状況に苦しんでいるオレに、楽しそうな神の声が追い打ちをかけて来た。
“どうする、このままじゃ永久にこんな調子だぞ？”
（だったらこの邪竜じゃない邪竜をどうしろと？）
“また忘れてんのか。ほれ、おまえはここに何しに来たんだよ？”
「邪竜を倒しに来たんだよ！」
“じゃあ倒せよ”
「あんな奴と戦えってか？」
“戦えよ、話し終わんないから、そろそろ終わりたい”
「またそれかよバカヤロー！」
邪竜はオレのことをいぶかしげに見ている。そりゃそうだ、神の声は邪竜には聞こえないんだからな。邪竜からしてみれば、オレは一人で叫んでいる事になる。だけどそんな事知るもんか、オレだっていい加減にウンザリだ。オレは邪竜を殺気の篭った目で睨みつけながら怒鳴った。
「おい、邪竜！」

「は、はい？」
怯える邪竜にも気を止めず、オレは腰から剣を抜いた。黒い刀身の幅広のバスターソード。禍々しい気配を帯びたそれは、竜殺しと名高い剣。過去の英雄達に、勝利と同時に死を与えたと伝えられる剣。竜殺しの諸刃の剣を邪竜へと突き付け、オレは心のままに叫んだ。
「おまえを……殺してやる！」
「は、はいぃ！？」
“お、言った言った”
「えっと……どう言う話の流れでそうなりました？」
「やかましい、もうお前なんか殺してやる、こんな話もう終わらせてやる！」
そうだよ、こいつ殺して姫様を助ければどう考えたって話は終わるよな、いきなり敬語使おうが知ったもんか。とにかくこいつ殺せばこの話は終わるんだよ。はたから見れば笑い話だけどオレからしてみれば悪夢以外の何物でもないこの話がな、ハハハハハハハハハハハハ。
“あのさー、そこまで壊れなくていいよ？”
「もとはおまえのせいだバカヤロー」
邪竜はあたふたとあわてた様子で、どうしようかと悩んでいるようだ。オレは構わず剣を構え、邪竜に向かって走り出した。邪竜はオレが今いる地点から約５ｍほど高い位置に居るが構わない、助走をつけて一気に踏み込みその崖を飛び越える、そしてそのまま邪竜めがけて飛びかかった！
「覚悟！」
もはや理性のかけらも感じられないオレの叫びに、神が冷静に突っ込んだ。
“振りがでか過ぎ、あと隙も多すぎだよ、かわされるなこりゃあ、飛ばれてお仕舞だよ”
苦しくも神の言葉通り、邪竜はオレの剣が届く寸前に空へと飛び

立ち、オレの剣は地面につき刺さった。地面から剣を抜きながら再び邪竜をにらみつけると、今度は叫び声が返ってきた。
「い、いきなり何さらすんや！」
「おまえを殺すと言っただろう！」
「まぁ……確かに」
「やかましいっ、降りて来い邪竜め！」
さすがにこんな事を言われて降りてくるほどアホじゃないらしい、邪竜は空の上で困った顔をして飛んでいる。空にいればオレの攻撃は届かない、と思ったらしい。なめるな、まだ手段はある。

6

まっすぐに邪竜を見据る、的と一体になったイメージを頭に描いた。そのイメージを頭の中に置いたまま片足を大きく踏み出し、右手に剣を握る、そして大きく右手を降りかぶり……

「でっりゃあああああぁ！」

剣を邪竜に向かって投げた。

“おいこら、武器投げんな”

神の静止の声はだいぶ遅く、剣はとうに空へ飛び立っていた。竜殺しと名高い剣は、空にいる邪竜へまっすぐに飛んで行き、あっけにとられている邪竜へと迫った。突然の事に邪竜は何もできず、ただそれを茫然と見つめる事しか出来なかった。剣は吸い込まれるように邪竜の首へと突き刺さり、そこにある気道と頸動脈を絶ち切った。邪竜は数秒の間そのまま飛んでいたが、目から光が失われていき、すぐに翼から力が抜け下へと落ちて行った。

邪竜は、倒された。

「……あれ？」

“なんか私の武器思想と物理学に大きく反する事やってくれたな”

……ちょっと待て、うっかりキレて戦ってたら邪竜が殺られたぞ、オイ。ラスボスがこんなに弱くていいのか？　つーかオレってば普段の数倍の力を発揮したのは気のせいか？

“気のせいではないんだなこれが……邪竜殺っちゃったなぁ、あっさりと”

「戦えって言ったのはおまえだろ！」

“まぁね、その通りなんだけどさ……やっぱり寂しいというか、悔しいというか”

神が寂しがってようが悔しがっていようが虚しがっていようが死

んでいようが、どうでもいい。
“ひどーい”
問題は邪竜がどうなったかだ、本当に死んだのか？　こんなにあっさりと死んでいいのか？　困惑したまま急いで崖から下を覗いたが、そこから見えたのは目も眩むような谷底だけだった。とうぜん底はまったく見えないし、崖に何かが引っ掛かっている様子もない。念のため空も見回したが、白い雲の流れる平和な空しか見えなかった。
「嘘だろ……」
自然とこぼれた言葉に、神がいつもの調子で返した。
“いまさら何を言うか、普通に邪竜は死んだんだよ、予定通り”
「予定通りってな、確かにそうだけど……」
何とも言えない感情に呑まれたまま谷底を見つめていると、暗闇に呑まれてしまうような気がした、やるせない気持ちがオレを包んだ。
誰かが死ぬのを見るのは、もう何度目だろう。
そんな気持ちも吹き飛ぶような、笑顔さえも想像出来るほどの楽しそうな声で神が言いやがった。
“大丈夫、しばらく後でまた会えるから！”
「さりげなくネタバレすんな！　つーか会えるのかよ！」
ビシッ！　と素早く手も使って突っ込んだ、気分台無しにも程がある。変わらず楽しそうな調子で神はナレーション風に言った。
“どういう理由で会えるのかは次回をお楽しみに”
次回ってなんだよ、こんな適当な片づけ方でいいのかよ。ふと思い出した事実に、オレは何とも悲しくなった。
「そう言えばこれは小説だった……だから何が起きても不思議じゃない……」
そうだな、神の言う通りかもしれない、どうせ小説なんだから、オレだってしょせんその中の登場人物なんだからな。ははは……、でもオレにとっては現実なんだよ、これ。

“おい、しょげるな、まだやる事あるんだから”
「あいつが死んだ後いまさら何をしろって言うんだ……」
崖に背を向けて、暗いオーラを放ちながら体操座りで落ち込んでいると、神が突っ込んできた。
“こら、ライバルが死んだときよりも落ち込んでるんじゃない”
「落ち込む暇もなかったんだよ」
“鬱い事は言わんでいい。何のために邪竜を倒したのか、また忘れたのかバカヤロー”
「どうでもいいよ、こんな話早く終わってしまえ」
“私だって終わりたいよ、でもこんな尻切れトンボな終わり方は出来んのだ。お前は誰かを助けるために邪竜を倒したんだろ？”
オレは顔を上げて、記憶の海を軽く漁った。
誰かって……
姫様じゃん

7

「忘れてたーっ！」

“どんだけ忘れっぽいんだよ、このヘタレ”

なんという事だ、キャラ紹介なんて物があれば絶対に出てくるであろう人物の事を（結構頻繁に）忘れるなんて！　ああ、なんという恥か、まさに生き恥！

“どんだけカッコよく言っても、事実は変わらない悲しさ”

そうだ、邪竜の死になどかまけている場合ではない。姫様を助けるためにオレは一体どれだけの命を犠牲にしたというのか、それらを踏みにじるとこだった！

“大げさな”

今こそ姫様を助けるときなのだ、さあ急げクーガよ！

“私のセリフ盗るな”

「さっきからうるさい、人がせっかく決意を新たにしているというのに」

ああもうなんだっていい、邪竜のことは後でどうにかなるだろう！

“てきとーな！”

それより今は姫様を助けるんだ、今助けなくていつ助けられるというんだ、神とコントなんかやってる場合じゃない。確か姫様は先ほど邪竜がいた後ろの位置にいるはずだから……

「目の前にいるじゃん！」

“お前大丈夫か？”

しっかり前を見てみれば、いるじゃないか姫様。さっき見たままの状態で、やっぱり地面にクリスタルが突き刺さっている、その中で姫様は変わらず眠っていた。

恐る恐る近づいて姫様の姿を近くで見ると、スコープで見た通りに姫様は近づくのが恐れ多いほどの美少女だった、そのまま姫様を眺めていたい気持ちと、直接触れてみたい衝動が起きた。

“触れろよ、つーか姫様助けろよ”
「……つくづく思うが、お前は雰囲気を壊すのが大好きだな」
邪竜はすでに倒されているのだから、このクリスタルは開くはずだ。おそらく大した力を加えなくても、このクリスタルは砕け、中の姫様は解放されるのだろう。オレはクリスタルにゆっくりと指を伸ばし、クリスタルに触れた。
その瞬間、オレの脳裏をいくつかの記憶が駆けめぐった。

ひたすら切り刻んだ。血の中に倒れ臥す、あいつ。陽光と共に、広がっていく血。初めて生き物を切った、あの感覚。泣き声と、子守歌。引き離された、手と手。黒髪の子供が、花畑を駆けて行く。鏡に映る、紫の道化。
そして、銀色。

指がビクリと震え、オレは手を戻した。なんだ今のは、他人事のように頭の中を駆け巡る、だが他人事ではない。この懐かしいような、悲しいような、心臓を締め付ける感覚。あれは、オレの過去……なのか？
何かが大きく揺らいだ。オレは今まで何をしてきたんだ、忘れかけていた、いろんな事を。忘れていいはずがないのに、自分が奪ったいくつもの命、どうして忘れかけていたんだろう。
殺してしまったんだ、全部。他に手段もあっただろうに、殺してしまったんだ。
どうしようもなく、立ち尽くす。オレは、今まで何のために。
“そんな事はどうでもいい、進めクーガ”
「……どこへ」
もういやだ、何もしたくない。なんでこんなものがいきなり見えたんだ、見たくなかったぞこんなもの、忘れたままで居たかった。忘れてはいけないとわかっていても、忘れたかったんだ。
自分が、何をしてここまで来たのか。

暗鬱としたオレの様子に辟易したのか、神はしばらく黙っていたのだが、なんの前触れもなく、大きく息を吸い込んだ。聞こえてきたのは歌声。

“あるぅ日〜ぃ、森のなっか〜ぁ、クマさっんに〜ぃ、出会った〜♪”

8

“クマさっんの～ぉ、言うこっとにゃ～ぁ”
ああ……ふざけた調子だけど、割と歌うまいなぁ……。
“お嬢っさん～、お逃げなっさい”
なんで逃げなきゃいけないんだろうなぁ……。

――思考、再起動――

「なんでいきなり『森のクマさん』歌うんだよ！」
さすがに突っ込んだ。危ない危ない、オレの思考回路が変な歌に汚染される所だった。神は満足そうな笑い声をあげて、歌うのをやめた。
“『森のクマさん』をチョイスしたのは気分だ”
「そう言う問題じゃなくて、オレのシリアスな気分返せ！」
“返してほしいの？”
「いや、返してほしくないけど」
“うひひ”
怪しい笑い声をあげてる神。さっきまで微妙な感じだったのに、上機嫌だな。なんでだ？
“さーてクーガよ、改めて姫さまを助けようじゃないか！”
「あ、ああ……それもそうだな、また忘れてた。ところで神よ、お前さっきからなんでそんなハイテンションなんだ？」
“気のせいだ！”
いい加減な返答が返ってきた。何か含みのある言い方だが『気のせいじゃないか？』と『気にするな』はほとんど同意義だから、気にしないでおこう。
“ここまで来て姫様助けずに帰る気か、クーガ！”
「まぁ、そのとおりだな」

“ファイト、いっぱーつ！”

神のやかましい応援を聞き流しながら、オレは再び姫様に指を伸ばした。よし、今度は何も起きない、ちょっと指先が震えているのは武者震いだと思っておこう。そのままゆっくりと指を近づけていく、そして震える指先がクリスタルに触れた。

その瞬間、音もなくクリスタルは崩れ、光る粒子となって風に消えた。姫様はクリスタルの中から解放された、しかしその瞳は今だ閉ざされている。

「ひ、姫様……？」

恐る恐る呼んでみたが、反応はない。まだ寝ているのだろうか？

まさか死んで……いやそれはない、邪竜は普通に閉じ込めていただけ、空気穴もちゃんとある。だったらやはり眠っているのだろう、眠ったままではどうにも対処できないので、姫様を起こそうと手の伸ばした所はいいのだが、どうにも手が震えたままだった。いかん、やっぱり気後れする、触ったら消えてしまうような気がするもんな、この姫様。幻のような、ここに居ないかのような雰囲気なのだ。姫様にどれだけ気後れしていようと、やっぱり動かないとな、頑張れオレ。

などと考えていると、姫様の目蓋がピクリと動いた。びっくりして姫様の顔を凝視する。目蓋が少しずつ開いていき、オレはその光景から目が離せず、硬直していた。

ゆるゆると目は開かれていき、瞳が半分ほど開かれ、その目はオレの姿を見た。

それと同時に、姫様のたおやかな腕が動いた。

ガンッ

（……え？）

痛みはなかった、ただ強い衝撃を全身に感じ、直後に全ての感覚がシャットダウンされた。一瞬完全な暗闇が世界を覆った後、他人

事のような痛覚が戻ってきた、瞬きをしていると、ぼやけた世界がゆっくりと見えてきた。全てが他人事のように感じるが、現実だ。
まったく回らない頭は、冷静に世界を感じていた。
オレはどうやら倒れているらしく、直角に傾いた世界を見ていた。その中にいる姫様は完全に目を覚ましており、容姿に似合わない大欠伸をしていた。
「ふぁ～あ、よく寝た……」
目を覚ますまでは確かにあった、あの儚げな雰囲気はどこにも無い。彼女は頭をバリバリ掻きながら立ち上がると、上からオレを見下ろして驚いたように言った。
「あれ？　あいつじゃ無いじゃん、人違いかよ！」
見事な一人突っ込み、口調と動作は非常にマッチしているのだが、容姿と服装が似つかわしくない。見た目はともかく、こんな事やっている人間を誰も姫様とは呼ばないだろう。まぁほかに呼びようがないので、姫様と呼ぼう。
「ちぇえ、せっかく髪伸ばしといてやったのに」
悪態をつくと、姫様は何処から取り出したのか刃渡り三十センチにも届きそうな大鋏を右手に持ち、器用に髪を切り落としていった、あれよあれよと言う間に、長かった髪はザンバラのショートカットへと早代わりした、綺麗だったのに、もったいない。さらに驚くべきことに、身にまとっていたドレスを一気に脱ぎ捨てた、その下からはドレスと同じ深紅の、しかしドレスと違い、とても動きやすそうな服が現れた、どういう仕組みか解らないが凄い早着替えである。
もはや服装も姫様とは言えない、多彩な表情に彩られた顔からは、力強い生命力を感じる。
何と言うか、お姫様がガキ大将に早変わり。まぁ吃驚。
そんな事を考えていると、姫様は多分オレに向けた言葉を発した。
「おい、大丈夫か？　加減が違ったからな～、ヤバイかもなこいつ」
ヤバイかもじゃなくヤバイと思う、だんだん体のそこが冷めてい

く感覚がする、体中に感じていた鈍痛は次第に遠ざかっていき、視界は明度を落としていく。

「おーい、おいオマエー、聞こえてるかー……おー……起き……」

9

姫様はオレの頬をぺちぺちと叩きながら、何かを言っているのだが、残念ながらもう聞こえないが。もう何も見えないし何も聞こえない。

（ひょっとして……オレ死ぬ？）

全感覚を奪われた世界で、オレの思考だけが動いていた。オレしか居ない世界……いや違う、神の笑い声は相変わらず聞こえている。

“はっはっは、不憫だねクーガ君よ”

（ちょっと待て、オレはマジで死ぬのか？）

“うん”

よかった、神とはどんな状況でもお話できるらしい、ちゃんと会話になっている。

（……ってぇ、よくない！）

“めでたしめでたし”

（全然めでたくねぇよ、オレは一話で死ぬのか？　こんなヘンなオチで話し終わっちまうのかよ！）

“続くよ、多分”

（多分かよ！）

“いや、続くけど”

こんな状況でボケないでほしい。いいや、それ所じゃない、オレの意識が闇に呑まれるように曖昧になってく、多分意識が完全に消えたら死ぬんだろう。それは嫌だ、死にたくない、まだこんな所で死にたくない、何よりこんな死因はいやだ！

“助けるはずだった姫様に撲殺されたクーガ、戒名は久我　朱彦”

（それ本名だから！）

こんな時でも突っ込んでしまう自分が嫌だ。ああ……もう、いろいろ考えるのも、難しくなってきた……。死ぬのか、オレは、死ぬのか？

“うん、死ぬ。そして黄泉返る”
（そんなの……ありか……？）
オレの意識は、完全に闇へ飲まれた。

「おーい、起きろ、起きろってば！」
彼女は、地面に転がっているクーガに声をかけ続けていた、いくら声をかけようとも、起きる気配は無い。盛大な舌打ちをした後、腰に下げているウエストポーチを漁りながら、大きな独り言を話していた。
「くっそー、騙されたぞコンチクショー。ファブニルのバカー、フォルのバカァ。なんかキモイもん見えたと思ったら、来たのはコ

イツかよ、例の時の人かよ。怪我を回復させても意味がない、この世界はもう持たない、だとするとやっぱりコレなんだよなぁ……」

などと言っている内に、彼女がウエストポーチから取り出した物は、絡み合う蛇の紋が掘られた黒銀の懐中時計だった。それを睨みつけながら、独り言を続けた。

「一回しか使えない貴重品……だが、今使わずしていつ使う！」

懐中時計の鎖を取り外し、それを円にしクーガを囲む。その傍らに彼女は立ち、懐中時計を構えた。それを開くと同時に、歌うように……いいや、歌った。

―Ｈａｉｒｅ〈ＺＨＡＴ（ＳＡＴＵＲＮＵＳ－ｃｈｅａｐｌｌ）＝ｚｈｅｓ＝［Ｃｏｕｒｅ・ｗ-ｖｈｏｕｃｌｌ］〉《来れ、サトゥルヌス》

9（後書き）

これで勇者クーガは終わりです。
次は半生霊クーガ。

1（前書き）

次の話が始まりました。

1

オレの名前は久我　朱彦、クーガ・グリムゾンと呼んでくれ。
オレはとある世界で勇者をやっていた。
あの金色のピアスをつけた瞬間にオレの運命は決まった、神の声を聞くことの出来るオレは勇者となり、ウィクトリア姫を助けるため、とうとう邪竜ファヴニルを倒した。

……それはいい、その内容が問題なんだ。

オレが倒すべき敵、邪竜ファヴニル。こいつ京都弁と大阪弁を混ぜたような……とにかく変な口調で話し掛けてきて、当然戦意喪失するよ。しかも自分の住んでいる洞窟の手入れが、やけに丁寧にやってあったり……オレが花粉症と言うことを知って、杉の木の周りで翼をバサバサやってたり……ほんとに邪竜か！？　って聞きたくなるような邪竜だったんだよ。あげくの果て一撃で殺られてるし。
何だかんだ言って、オレは邪竜を倒した。そして超絶美少女の姫様を助けだしたんだ。姫様を閉じ込めてたクリスタルを壊して、姫様の手がゆっくりと持ち上がったときだ。
その瞬間に殺された。
冗談じゃない、マジで、ほかの誰でもない姫様に、素手で。
うつろな意識で見てた姫様は明らかに姫様と呼べそうな人には見えなかったし……どうなってんだかオレにもサッパリだ！

あとな、オレは人とは違うところがある。
勇者だとかそう言うのは関係なしに、決定的に違うところがあるんだ。あのピアスをつけた瞬間に知った、いや勝手に教えられた。

オレは、

自分が小説の主人公だと知っている。

2

「と言うわけで、前回説明を兼ねた序文が終わったわけだが……何だよこのタイトル！？」

“半生霊クーガ”

「冷静に教えられてもな、どんなタイトルだ！」

“はんなまれいクーガ、ではなく、はんいきりょうクーガと読んでくれ”

「いや、オレが聞きたいのはそこじゃない！」

“浮浪者か亡霊かさんざん悩んだあげく……半生霊だそうだ”

「なんでそこに行っちゃったんだよ、タイトル変えろ！」

“だってぇ、良いタイトルがないんだもん”

「少なくともこれは良いタイトルじゃない！」

“今あの世にいます”

「話しそらすな！」

神に話しをそらされてしまったのだが、あの世にいるのは確かだ。と言っても、オレはあの世に来るのは初めてなので、本当にここがあの世なのかは解らない。でもここはあの世だと思う、まぁ神がああの世だと言ってる時点で、おそらくあの世だろう。ついでに言うと、訳も解らないまま殺されてしまったオレが、何故こんなに落ち着いて話せているかと言うと、混乱しすぎて逆に落ち着いているだけだ。

“お前は既に死んでいる”

「言うな、そのセリフを言うな。マジでオレは死んだのかぁー！」

“お前は既に死んでいる”

「二回も言うな！」

“大事な事なので二回言いました、死んでも生きが良いなお前”

「そんな事言われても、うれしくない……」

神のひどい言葉で地に伏すオレ、いつもの内心会話ではなくちゃ

んと口に出して喋っているのは、他に誰も人間がいないからだ。
オレが今いる空間は、黒い空間だ。そう、暗いではなく黒いのだ。自分の姿も地面もはっきり見えるのに、周りはただ黒いだけで何も見えない。具体的に言えば、漫画でオレ以外の背景が全部ベタ塗してあるような状態だ。周りを見回しても何も見えやしない。
「この状況……死んだら全てが終わるってやつか」
“次回作もあるよ”
「はいはい、終わらないんだな」
神の声を聞いていると、落ち込んでいる事が馬鹿馬鹿しくなってくる、と言うより色んな事にウンザリしてくる。とりあえず地面と仲良くなっていても仕方ないので、立ち上がろう。立ち上がったはいいが、こんな空間で何をしたらいいのか解らない。こんな時こそ神に聞いてみるか。
「それで、オレはこれからどうすればいいんだ？」
“歩け”
オレの質問に対し神は簡潔な回答を即答した、しかし意味が解らない。
「……はい？」
“ウォーキング”
英語にされても意味がない。歩けとい言いたいのは解ったが、どちらへ向かうべきなのか、また何で歩くのか、と言ったところが解らない。
「何処へ、何故？」
“そのへん、てきとーに歩きんしゃい”
どうしろってんだよ……こんな黒い空間で歩けと言われても。
“さっさか歩け、ハリー”
「オレはハリーじゃない」
”そのハリーじゃない、ハリーアップ！　とかのハリーだ、つまり早く”
「ややこしいな……」

いくら抗議しても無駄だと解ったので……まぁ神に抗議して通った覚えはないのだが、オレはとりあえず前へ歩きだした。何も見えない中を歩いて行くのはなかなか勇気がいる、一応勇者としてはキビキビ歩くべきなんだろうが……

“今は半生霊”

「うるせぇ」

今のオレが勇者でないのは確かだが。勇者云々は関係なく、オレは足元に気をつけながら歩いた。さっきから前に進んでいるようには全く思えないのだが、確かに歩いている感じはする。どうせ反論してもウォークウォークウォーキング！　と言った感じの答えしか返ってこないだろうから、オレは黙って歩いた。

何分歩いていただろうか、真っ黒な世界に異変があった。歩いていた方向の先に、何かが見えたのだ。遠い位置にあるらしくよく見えないが、何かがあった。

「なんだあれ？」

“ウォーキング！”

「あれに向かって歩けって事だな」

最近、神の使う謎の言葉が理解できるようになってきた。便利には違いないが、イコールで神に慣れてしまったという事に繋がる、なんか嫌だ。それに向かって歩いていくと、だいぶ遠くにあると思っていたのに直に近くまで来た。遠くからは解らなかったが、近づくにつれそれが何なのかが解った。

3

それは、門だ。巨大な門が黒い空間に立ちはだかっていた。黒い色をした門と白い色をした門が二つ並んでいて、完全なシンメトリーとなっていた。それにしても大きい、今まで見た門の中で一番大きい、装飾も一番凄いな。もしかしてあれか、ここはあの世とこの世の狭間で、あの門はあの世への門か。

“あれは地獄の門です”

「ちょっと待てぇ！　既に地獄行き決定なのか！？」

“シャレだよ、ダジャレ”

「本気で信じかけたじゃねぇか……」

脱力しながら歩いていくと、門のすぐ前まで来た。近づいて見るとなおさら大きく感じる、見上げると首が痛い。

ここまで近づいてやっと気づいたのだが、なんかいる。門の前になんかちっこい黒いのがいる。真っ黒な格好をした子供が、草でできた敷物の上に敷いてあるクッションの上に座って、緑色のお茶飲んでる、ズズーッて音を立てて飲んだ、行儀悪い。なんか茶色くて足が短く、丸い机が置いてある。なんかもう一つクッションがおいてある！

何だこの子供、格好だけ見ると魔導師に似てるような気もする、横にでっかい杖置いてあるし。でも何でここにいるんだよ、ここはあの世だろ？　もしかするとこの子供、死神かもしれない、オレを天国だか地獄だかに連れて逝く、それっぽい格好してるしな。

「あ、やっと着ましたか」

怪しい子供が話し掛けてきた、どうしよう！？

“おちつけよ、ボケナース、アテンション、ファーンタスティ～ック！”

突然神が叫びだした、ウルサイ、お前が落ち着け。

“私はいつも通りだ”

などと考えている内に、落ち着いた。神と話していたら落ち着いたなんて、何だか釈然としない。
そうこうしている内に、その怪しい子供はお茶をもう一つ注いで、クッションを指しながら言った。
「一先ず座って下さい、大分混乱して居るでしょう？」
言う通りにして大丈夫なのかと思ったが、オレは言われた通りに座った、目の前の子供は怪しいが、悪意は感じられない。だが、こんなスタイルでお茶をするのは初めてなので、どう座ったらいいのか解らない。とりあえず目の前にいる怪しい子供と似たような座り方をしたのだが、どうにも座り心地が悪いので、胡座をかく事にした。
オレが座ると、怪しい子供はこちらにお茶を差し出してきた。お茶を受け取ると、その子供は軽いお辞儀をしてから口を開いた。
「今日は久我さん、僕は冥界の番人の様な者です」
少年らしいボーイソプラノで、子供らしからぬ落ち着いた口調を用い、何とも解りにくい自己紹介をされた。こちらの事はすでに知っているらしい、自己紹介は必要なさそうだ。しかし、冥界の番人ってなんだ。
「つまり……閻魔様？」
「閻魔大王とは違います。僕は基本的に冥主と呼ばれています、閻魔様と呼ばれている者とは違いますよ。所で、何で畳と緑茶を知らないのに、閻魔大王を知っているんですか？　貴方って西洋人なのか東洋人なのか、はっきりしませんね。ああ、貴方の世界には西洋も東洋もないんだった……。見た目が日本人に似ていたもので、うっかりしてしまいました」
冗談半分で言ったのに関係のない所まで突っ込まれた、日本人ってなんだ。それより、何でオレがこの敷物とお茶を知らないって解ったんだよ、読心術でも覚えてんのか？　子供のようなナリをしているけどかなり毒が有りそうだな、それにしてもじじ臭いな、この閻魔様。

“そう言えばおまえって微妙に日本人っぽい”
突然沸いてきた馬鹿神は“なんだそのダッサイの！？”話がややこしくなるからひっこめ。閻魔様がオレの頭の中で繰り広げられている事を知っているはずもなく、話を続けていた。
「その辺りは置いておいて、最初に言って置くべき事は……貴方が死んで居ると言う事ですね、自分で理解出来ていますか？」
「え……あ、ああ、うん。理解したくないけど理解できてる」
その答えを聞くと、閻魔様はため息をついた、いかにも憂鬱そう。
「そうですか、それは良かった。でも実は良く無い」
「どっちだよ！？」
「いやぁ、色々と事情が有りましてね」
ハァ～、と重ねて物憂げなため息をつく閻魔様。少しはまともそうな奴だと思っていたのに！　オレの行く先々にまともな人間はいないのか？
“やーいやーい、バーカバーカ”
閻魔様はめんどくさそうに話を続けた。
“スルーネタは飽きたぞ”
やかましい。
「実は……貴方はまだ死んでいないんですよ」
「マジで！？」
暗雲から希望の光が射し込んできた。身を乗り出して叫んだオレに、閻魔様はいたって冷静に返した。
「心肺停止状態ですが」
希望の光はすぐに消えた。
身を乗り出した勢いに任せて机に墜落した。オレが落ちた時の衝撃で、中身がこぼれそうになったお茶を押さえながら、迷惑そうな顔で閻魔様が話を続けるのを、オレは顔だけ持ち上げて聞いた。
「脳内出血も起こしてましたし、本来なら数分で死ぬ所でしたが、貴方を殺した人物が問題でしてね。色々と言ってましたが、簡単に略すと『やっべ、うっかり殺っちまったよ。死なせちゃダメだよな

ぁ、めんどいけど』などと言って、中途半端に生かしているんですよ。おかしな話でしょう？」

オレを殺した人物＝姫様

なんだか悲しくなってきた、生きていた事は嬉しいけどなんだこの扱い。姫様、オレがあんたのためにどれだけ頑張ったと……。机に顔を伏せて落ち込んでいると、励ますように閻魔様がお茶を差し出した。さっき閻魔様が緑茶と言っていた緑色の液体は温くて苦かった。オレがお茶を飲んでいる間にも、閻魔様は話していた。

「あまり気にしないでやって下さい、あの人性格はアレでも中身はかなり繊細ですから。貴方をうっかり殺した事とかその他諸々、かなり気に病んでいる筈ですよ、証拠に事後処理がかなりしっかりしている」

「何処が……」

「貴方を半分死んでる状態で留めて居るのにも理由が有るんですよ、そうしなければならなかったんです」

閻魔様の話を聞きながらも、相変わらず落ち込んでいるオレを見つめながら、閻魔様は告げた。長いため息をついたあと、あまり言いたくないんですけどね、と前置きを置いて。

3（後書き）

先は長いなぁ……

4

「貴方の住んでいた世界は、既に無くなりました」

……は？　世界が、無くなった？

思考が止まった、閻魔様の言った言葉が理解できなかった。世界が無くなったとはどういう事か、閻魔様が何を告げたのか解らない。いや、解ろうとしていないのか。淡々とした口調で説明は続けられた。

「貴方が殺めた存在、その人は貴方の世界の神だったんですよ。貴方のいた世界は、もう何時がたが来てもおかしくない、そんな状態でした。その状態で楔でもある神が死ねば、世界はバラバラになって消えてしまいます。言ってしまえば、神を殺した貴方が世界を壊した事になりますね」

その言葉に、体が固まった。その原因に、思考が凍った。その事実に、心が止まった。現状がやっと理解できたオレは何も言えなかった。嘘だと思いたかったが、閻魔様はそのような素振りはちらとも見せず、こちらを見つめている。

一体どれの事だ？　今までオレはたくさんの命を葬ってきた、たとえその理由が正義だとしても、オレは地獄へ落ちるのではないかと考えていた。しかし、こんな状況は考えた事もなかった。オレのせいで世界が壊れるなんて。オレの世界は既に無い、オレの世界はオレが壊した。そんな訳あるか、何の冗談だ、これは夢か。

混乱の最中、声が聞こえた。

「そう気にせんといておくんなはれ、クーガはん」

思考が今までと違う意味で固まった。背後からとても聞き覚えのある声が聞こえた、そして何か固い物で軽く肩を叩かれた。声を聞

いただけでそいつが誰かわかった。ああそうだとも、この変な喋り方といいよく覚えている、忘れようがない。理由は解らないが、何故だか心の奥底に喜びと怒りが湧き出して来た。それと同時に大きな混乱がオレの思考を乱し、感情に任せるがまま、オレは振り向きざまに背後にいるそいつに向かって叫んだ。

「邪竜かよ！」

その言葉に対して、邪竜は困った顔をしていた。どう反応するか悩んだらしい。

……オレ、なんか間違えた。邪竜かよ！　って何だよその言いかた、普通こんな感じのシーンなら、感動の再会かなんかだろ。いかん、やり直したい。うっかり突っ込んでしまった。

「いきなりなんや」

オレの間違った突っ込みに対して、とりあえずと言った感じで、冷静な突っ込みを返された、間違いない邪竜だ。何処からどう見ても邪竜だ、誰が何と言おうと邪竜だ、三百六十度の何処から見ても邪竜で間違いない。相変わらず角はキラキラで体は真っ黒、爪はやっぱり長くてでかい。とりあえず邪竜が目の前にいる訳だが、思考は余計に混乱したままである。もうわけわかめと言いたい状況だコノヤロー。混乱しすぎたオレは、気づけば思いついたままの言葉を叫んでいた。

「何でここにいるんだよ、つーかそんな爪で人の肩を叩くな！」

「ワイも死んだからに決まってるやないか、あとワイの爪は何も切れやせんで！」

「そんなナリで切れねぇのかよ！　あといつの間に後ろに立った！？」

「切れんモンは切れへん！　忍び足で後ろに立ったのは今さっきや！」

「やっぱりお前なんか邪竜じゃねぇ！」

「せやから邪竜とちゃうってゆーとるやろ！？」

……一通り言いたい事は言い終わった。気づいたら立ち上がって

叫んでたよ、どれだけはっちゃけてるんだよ、オレ。喜んでるのか怒ってるのか、自分でもわからねぇ。

“そうだね、そろそろ冷静になろうか”

あーはいはい、お前に言われるまでもないよ。

5

そろそろ落ち着いてきた。立っていた所を再び座ると、闇魔様が邪竜に向かって言った。

「お久し振りですね、竜王さん。取り合えず座って下さい、お茶も用意しますよ」

「その呼ばれ方は久し振りやなぁ」

「このちっちゃいクッションにどうやって座れって言うんだよ、このナリで！？」

少しテレくさそうに頭を掻いている邪竜は無視し、邪竜に向かっていた体をぐるりと反転させて闇魔様に突っ込むと、闇魔様はしれっとした顔で答えた。

「さあ？　僕は湯飲みを取って来ます」

「オイッ！」

「まぁまぁ、クーガはん、落ち着いておくんなはれ。別に問題無いでな」

邪竜が話に割って入った訳だが、何が問題無いのだろう、その辺で座っているから問題無いという事だろうか。そんな事を考えていると、邪竜が謎の行動を取った。

邪竜は、机から少し離れた位置に立つと体を丸め、その姿勢から一気に体を伸ばしながら言った。

「てれれれぇ～ん」

擬音にかぎかっこを付けるとこれほどまでにダサイとはな。

ああ……そんな事言ってる場合じゃない。かぎかっこなんか大した問題じゃない。邪竜がくるくる回りだした事の方が問題だろう、バレリーナさながらの軽やかな回り方だ、その巨体がくるくる回っているせいで風が発生しているのを忘れるくらいだ。どうやって回っているのか、原理がよく解らない。そんな事より、いきなり何を始めだしたんだこいつは？

「てんっ！」
最後の擬音とともに、邪竜の動きがピタリと止まった。同時に黒い霧のような物が邪竜の体を包み込む。何が出てきても驚かないようにしよう。これ以上驚いてどうするんだ、既に驚きすぎて何も言えないんだぞ？
最後に風が吹いた。その風は邪竜を包んでいた黒い霧を吹き飛ばし、中にいた者がよく見えるようになった。想像していた通り邪竜の姿は変わっていた、そいつは自分の姿を見直したあとに尋ねてきた。
「この格好は久し振りなんやけど……どんなもんや？」
どんな表情をすればいいのかも解らないので、無表情で質問し返した。
「お前は誰だ？」
「こんな単時間で忘れたんか！？」
「忘れてないけど！」
ハイ落ち着こうか、混乱している時ほど冷静に解説したくなる。主人公視点の小説なんだからきちんとした状況説明は必要だ。
頭には金色の角が四本、赤い目もそのままだ。力強そうな黒い翼も背に生えている。だが、鱗に包まれていたはずの体は古風な黒衣をまとった体となっており、頭部からは足元まである黒髪が生えている。困ったような表情を浮かべている顔は彫刻のように整っている。
ああそうだとも、ここまで言えば想像はつくだろう。邪竜が人間っぽい格好になってるんだよ！
「擬人化か、擬人化なのか、擬人化しちゃうのか？　いい加減にオレを混乱させるのはやめてくれ！　あとなんでこの空間には美形ばっかりなんだ、オレが浮く！」
「余計な事まで突っ込まないで下さい。お茶と、あとお負けで蜜柑を持って来ましたよ」
戻ってきた閻魔様は、右手に持っている丸い板の上に、湯飲みと

ミカンと言うらしい果物、左手にはオレも使っているクッションが持ってあった。右手に持っているものを丸いテーブルの上に乗せると、左手に持っているクッションをテーブルの傍に置いた。
「取り合えず落ち着きませんか？　竜王さんも座って」
「いやぁ、おおきに」
「いえいえ、そんなに騒がれて居ると此方も迷惑です」
さりげなく辛辣だな、闇魔様。
“そりゃあ彼には色々と隠された過去があるから”
（関係ないだろ）
出番がないので横槍を入れてくる神に、内心で突っ込みを入れていると、闇魔様が持ってきたミカンとやらの皮を、邪竜がビリビリと剥いていた。細かい皮が机の上に散らばっていく。闇魔様もミカンの皮を剥いているが、此方はきれいに皮が繋がっている。オレも机に上のミカンを一つとり、皮を剥こうとしたが、意外と難しい。ミカンに指がつき刺さるだけで皮が剥けないのだ。
オレがミカン相手に本気と書いてマジになっているのを見つけた闇魔様が、オレからミカンを奪い取り、簡単に皮を剥いた。
「蜜柑を食べるのは始めてですか？」
「見るのも初めてだ」
「こうすると楽でっせ」
邪竜はそう言うと、ミカンを一つ手にとり、両手で持ってまっぷたつにした。割れたミカンの中から中の果肉を取り出して食べている、楽そうだ。
「なるほど……って」
机の端を掴み、叫んだ。
「何でこんな和やかにミカン食ってるんだー！！」
秘技・ちゃぶ台返し！

6

「危ないじゃないですか」
気づけば、机の上のお茶とミカンは一瞬で避難されていて、それを一人で行った閻魔様は冷静に答えた。それとは対象的に、邪竜はびっくりして何もできなかったらしい。
「この状況はおかしいだろ、なんでオレが邪竜と呑気に食卓を囲んで普通に会話してるんだよ？　オレと邪竜が！」
机を直してから、邪竜を指さして言うと、直した机の上にお茶を並べながら閻魔様がなだめるように言った。
「そんな事言っても……、今更生前の事なんか、どうでも良いじゃないですか」
「閻魔様には聞いていない、邪竜に聞いているんだ！」
「ワイですか？」
相当戸惑っているのか、邪竜は突然敬語になった。あの時と一緒だ、オレが邪竜を殺した時と。デジャビュを感じ、それが嫌で目を逸らした。そして、オレは邪竜に言いたかった事を叫んだ、心の何処かでずっと悩んでいた事を。
「お前はオレが憎くないのかよ？　オレはお前を殺したんだぞ！」
オレの言葉に、邪竜はひどく困った顔をしている。オレは容赦なく畳みかけた。
「いいか、正直に言え。オレが憎いか？　オレを殺したいか？　どうなんだよ！　オレは一方的に殺すばかりで相手の気持ちなんか解りやしない、解らないんだよ、オレが殺した相手の気持ちが！」
一方的に叫ぶオレに、邪竜はやはり困った顔をしている、それが見たくなくて、また目を逸らす。何してるんだオレは、これじゃあまるで駄々をこねている子供じゃないか。邪竜は落ち着いた声で答えた。
「別に恨んでなんかおりまへんで？」

こちらを見ている邪竜は、いつになく冷静で真剣な顔をしていた、そして、微笑んでいる。何でだよ、どうして、何で―どいつもこいつも、笑ってるんだ《・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・》。

「ワイの死に方は、ほとんど自殺みたいなもんや」

「何が自殺だ、殺したのはオレだろ！」

「そない言われてもなぁ……」

いつもの困ったような顔をする邪竜。だから、そんな顔をされると、何を言えばいいのか解らなくなるんだよ。どいつもこいつも、訳わかんねぇ。オレが沈黙したのを見て、今度は闇魔様が口を開いた。

「そう言えば竜王さん、陽上さんが『ファブニルに騙された！』と喚いていましたが、何をしたんですか？」

「いや……それはなぁ、クーガはんを釣るために、ちぃとな」

「ははぁ、成る程」

知らず知らずの内に、痛いぐらい手を握りしめていた。

「……オレを釣るって、どう言う事だ？」

「あ、言い方があかんかったな。単にクーガはんがワイの所に来るように仕向けただけやで、別にクーガはんを釣り竿で釣り上げようとした訳じゃ……」

「そんな事を聞いたんじゃない。どうして、どうしてわざわざオレに殺されるような事してんだよ」

邪竜をしっかりと見据える、オレは目を逸らす事をやめた。逃げてはいけないんだ、逃げ続けていたら、前に進めない。だから、今ここで邪竜に聞かなくてはならないのだ。

「どうしてオレなんだ！」

邪竜も目を逸らさなかった、紅玉のような眼がこちらを見据えている。赤い目は苦手だ、赤い目で見つめられると落ち着かない、いいや赤い目を見るのが落ち着かないのか。しかし、オレはその目を見据え、答えを待った。

「クーガはんに、殺されたかったからや」

邪竜はしっかりとした、聞き間違えることもできないような口調で言った。目を逸らしたくなる衝動を抑え、邪竜に再び問いかける。
「なんでオレなんだ？」
「訳は二つある。一つは、クーガはんが自分で見つけなあかんもんや。そしてもう一つ、それはワイの私情や……つまり」
気のせいだろうか、先ほどからちゃんとした答えが返ってこない。邪竜は、一言一言、しっかりと答えた。だが、何かおかしい。
邪竜は腕を組み、胸を張って言った。
「訳は言えん！」
「何でそんなに偉そうなんだテメエエェェ！！」
机を飛び越え邪竜に掴みかかる、邪竜はそれをかわしもせず、抵抗もしなかった。ムカついて来たので、襟元をつかみ力の限り振り回す。
「何が『訳は言えん』だゴラアアァァ！！」
「これだっけは譲れぇえぇっへん。言いっわんと、決めたんやっからぁなっ！！」
これだけ激しく揺さぶっているにもかかわらず、以外と余裕な邪竜。しかし声が変な事になっている、余裕なのは精神面だけだ。すでに首がいろんな意味で危ないし、吐き気も催してきたようだ。闇魔様が立ち上がった、止めるつもりだろうか、だがやめる気はない。
「やめなさい」
やめる気はなかった。だが、闇魔様の長い金属製の杖が頭にクリーンヒットして、オレは気絶した。
“シリアス消滅☆”
気絶する間際に、神のむかつく声が聞こえたが、言い返せなかった。

7

意識が戻ると、邪竜と闇魔様は世間話に講じていた。
「成る程、そう言う内訳ですか。つまり、竜王さんの謀は巧く行ったと」
「やめておくんなはれ。はかりごとなんて、そんな大層なもんやないで？」
「いいえ、流石あの『ひきこもり』と言われた竜王だけあって、自分の世界の事は良く解っているな、と」
「……言わんといて」
どうやらオレが気絶している間に肝心な事を話していたらしい、おのれ邪竜。とりあえず起き上がる。
「あ、起きたか。おはようさん」
邪竜の笑顔にイラッと来たオレは、もう一度こいつに掴みかかってやろうと思ったのだが、闇魔様が杖を持ち直したのでやめた。
「お元気そうですね、久我さん」
「エエ、オゲンキデスヨ」
嫌みったらしく棒読みで返事をしたのだが、闇魔様はアルカイックスマイルを浮かべただけだった。この人の肝の据わりようが恐ろしい。何事もなかったかのように、闇魔様はオレの手に何だか良く解らない物を置いた。
「はい、どうぞ」
「どうぞって……これ何？」
闇魔様がオレの手に乗せた物は、何やら不気味な懐中時計だ。三日月のような紋章の上に、絡み合った二匹の蛇の紋様が蓋に彫られており、銀製にもかかわらず黒光りしている、黒銀とでも呼ぶべきか。それは大きさの割りに、ズシリと異様に重かった。
「不気味な懐中時計だな……」
「姫様からのアフターケアですよ」

「姫様からぁ！？」
何故ここで姫様の名前が出てくるのか、そう言えばオレを助けたのは姫様だったか。それにしたって、何故この懐中時計が出てくるのかが解らない。こういう曰く付きっぽい品物に良い思いではないので、出来たらすぐにでも手放したいのだが、姫様からと言われたら捨てる訳にもいかない。これは何なのかと悩んでいると、邪竜の声が聞こえた。
「な、なんてもん持ち出してくるんや……！」
邪竜を見ると、理由は解らないが、凄い驚いた表情をしている。いやむしろこの時計を怖がっているような雰囲気だ。それをなだめるかのような優しい口調で、闇魔様が懐中時計の説明を始めた。
「この懐中時計は、とある時の神様の持ち物の模造品（レプリカ）なんですよ。ですから安心して下さいね、竜王さん」
「なんや……そういう事かいな、てっきり姫さんが勝手に強奪したのかと」
「模造品（レプリカ）を造るのは勝手にやったみたいですよ」
「あかんやないか」
「ですよねー」
この二人はさっきから自分達にしか解らない会話ばかりだ、オレだけ除け者。闇魔様の説明はまだ続いた。
「これの本来の役目は、貴方の時間を止める時に使われたので、使い物にならないのですが、別件でまだ使えるんです。この時計は、貴方があの世に居られる残り時間を示します。時計が読めないかもしれませんが、時計を持っていれば十分です、時間が来れば自動的に生き返ります。体感時間で二十四時間過ごして下さい、方法は問いません。別にここで二十四時間過ごしても良いですけれど、折角ですからあの世も見て来ると良いでしょう。貴方の判断に任せますが」
何だか凄いアバウトだな、あの世って。それにしてもあの世へ行けるのか、こんな変なお茶屋さんみたいな所ではなく、ちゃんとし

たあの世へ。
「まぁ……行けるなら行ってみたい気はする」
生き返ると保証されているのだ、そりゃ逝ってみるしかないだろう。オレが承諾したのを聞くと、閻魔様はすぐに次の選択を出した。
「では地獄か天国か、どちらが良いですか？」
とんでもない選択だった。
「選ぶのかよ！」
「選びますよ、どうぞお好きに」
“てってー、てれれれ、てってーてれれれ、てってーてれれれれ、てれれれれれれれ”
（今までずっと静かにしてたのに、何でいきなり天国と地獄！？）
“いや……名は体を表すというし”
（言葉の使い方を間違ってる！）
なんと言う展開だ。地獄か天国か選べって、こんな質問が来るとは思わなかった、さあどうする……？
「天国を選ぶに決まってるじゃねぇか！」
「では白い扉へ」
閻魔様の一言で、巨大な白い門がひとりでに開いた。オレのすぐ傍にずっとあったの覚えてたか？　門の中からは白い光が差し込んできて、中の様子は伺い知れない。
「……こんな簡単にあの世に逝けるとは」
“本当に簡単だねぇ～”
本当に拍子抜けだ、事がサクサク進みすぎてるだろう、しかも一日で帰れるとなればなおさらの事である。なんてお手軽な。
改めて振り返れば、背後には黒い二人。閻魔様はめんどくさそうな顔をして立って居て、邪竜はいい笑顔を浮かべて立っていた。
「じゃあ……逝くぞ？」
「逝ってらっしゃい」「気ぃ付けてな」
出かける子供を見送るかのように軽い調子で見送ってくれる二人だが、きっとこの二人とはもう二度と会えないんだろう。そう考え

ると、何だか悲しくなってきた。オレは二人になんと言い返すべきか少し悩んで、結局一番簡単な言葉を返した。

「いってきます」

8

「……行きましたね」
「行ってまったなぁ」
クーガを見送った二人は、再びちゃぶ台へ戻りミカンを剥きはじめた。剥いたミカンを食べながら二人は話していた。
「これで良かったんですか、竜王さん。これで貴方は完全に終わってしまいましたよ？」
「これでいいんや、これで」
冥主は深い溜息をつきながら言った。
「まったく、曾ては竜王と呼ばれ、砂の女王からも高い評価を受けていた貴方は何処へ行ったんですか？　何時の間にか性格まで変わってますし」
「そないな事はもう昔の事や、民からは邪竜と呼ばれ、自分の世界を保つ事さえもままならなくなっとった。それで綺麗に片づけようとして、こうなったんや。ワイとしちゃ最高の終わり方やで」
竜王の言葉に、冥主の溜息は深くなるばかりである。ミカンに手を付けるのを止め、お茶に手を出した頃に冥主は問うた。
「彼の事、貴方はどう思っているんですか？」
「言ったやないか、別に恨んでなんかおりまへんって」
「個人としての意見ではなく、神としての貴方に対して聞いているんです。彼は貴方を殺し世界を壊した、言わば大罪人と成る筈の人物でした。しかしそうはならなかった、そう言う者だからですよ、そして貴方はそれに満足して死んで逝く。それをどう思うかと聞いているんです」
「なんや、冥主はんも『危険因子は抹殺するべきだ』とか言いなはるんで？」
「いいえ、僕には関わり合いようの無い事なので。ただの好奇心ですよ」

竜王はお茶を置き、軽く笑いながら言った。
「彼はまだなぁんも悪い事はしとらんのや。知ってるかえ？　ワイの家にいるやから共はだぁれも彼の事、恨んだりしておりまへんのや。せやから、ワイに彼が居て良いのか悪いのか、それを決める事は出来まへん。ワイの意見としては、まだ結果を出すのには早いんやないかと思っとる。彼はまだまだ悩み続けるでな、まだ時やない」
「それだけですか？」
冥主の追及に、竜王は声をあげて笑った。
「せやなぁ、ワイは彼のこと気にいってまったで『何者であれ生かすべきだ』っちゅう意見に賛成するわ。まぁ、ワイにはもう関係の無いことなんやけど。今ん所姫さん位やろ、はっきりそう言ってはるの。ワイの代わりに一票入れといてくれんか？」
「考えておきます」
冥主も共に笑った。

竜王は立ち上がり、暗闇へと体を向けた。
「さて、そろそろワイも行くとしますか」
「何処へ行きますか？」
「せやなぁ、クーガはんを困らせれる所がええわ」
「悪趣味な人だ、よほど気に入ったんですか？」
「別にええやろ？」
「そうですねぇ、きっと今よりは彼に近い存在になりますよ」
「せやなぁ、彼はすぐどっかに行ってまうでなぁ」
竜王と呼ばれた者は、笑うとか、感情を外に出すのが苦手だった、そして動く事を嫌った。しかし、かつて竜王と呼ばれた者は、自然な笑みを浮かべ、先へ進もうとしている。邪竜は振り返りもせず軽く手を挙げて、別れを告げた。
「んじゃサイなら」
これからも永遠に冥主と呼ばれ続ける者は、苦笑を浮かべながら

別れを告げた。

「さようなら」

8（後書き）

半生霊はこれで終わりです、次は番外編をのせようかと思います。
でも時間がないので、更新は遅くなるかもしれません。
いつか邪竜の昔話も書きたいなー、と思っています。

0（前書き）

番外編です。
ひたすらカオスです。

0

ここは名称未定高校、別に名前が決まっていない訳ではない、元からこう言う名前である。なんか変だろって所は気にしないで、マジで気にせんといて。そこの校庭に、二人の人間（？）がいた。

茫然とした顔で立ち尽くしている、少年と呼ぶべきか青年と呼ぶべきか悩んでしまう、齢十八と年齢的には青春真っ只中の男。彼はタイトルにも名前の入っているクーガ・グリムゾンだ、忘れがちだが本名は久我　朱彦である、読みはクガ　アカヒコ、覚えておいてくれると嬉しい。

名前の前についている称号は逐一変わるのだが、本業は勇者のはずだ、見た目もそれにふさわしい格好をしている。即ち今の状況だと、地球の学校にファンタジックな勇者がつっ立っている、普通に不審者だ。

そんなクーガと対峙している人物。いや、人なのだろうか？　どんな格好をしているかは……うん……お楽しみって事で、まだ口に出したくない。その人物は手を空高く突き上げると、とても明るい口調で言った。

「学園クーガ、始まるよっ！」

それはカオスの宣言だった。

0（後書き）

始まってしまいました、番外編。
０話が短すぎて投稿できなかったので、空白で増量してむりやり投稿しました、すみません。
そのうちに書き貯めたぶんがなくなるでしょう。

1

「何だよ、このいきなり過ぎる展開は。神だろお前、神なんだろ！？」

「よくお解りで。いかにも、私はかみちゃんだよ！　チャオ！」

「何がかみちゃんだ！」

神と呼ばれた人物、つまるところ外見描写を渋られた方だ。それにビシバシと突っ込んでいく、一応勇者クーガ。この程度のつっこみ慣れた物だと言わんばかりに、神はクーガの言葉を無視して解説を始めた。読み飛ばしＯＫ

「ハイ来ましたよ、これ本来なら文化祭特別バリューの冊子に載ってた物で、実はイラストとかも入ってたけど、残念ながら乗せられない。まぁ、当人の精神的に恥ずかしい絵だから、別に無くてもいいけど。所で、誰も評価もメッセージも入れてくれないの、何か寂しいよ」

「そんな話し知らねぇよ、つーかさりげなく要求言ってんじゃねぇ！」

「周りの登場人物がどれだけ作者がどーのこーのと言いだしても、主人公にはそれが伝わってない。さりげなく宣伝を入れてもあまり問題にならない。それが番外編」

「番外編なのかよこれ！」

いまさら気づいたらしいクーガ君、アホですね。ケタケタと笑いを返すだけの神に、クーガはどうしてもつっこまなくてはならない事をつっこんだ。よくここまでつっこまないで来たもんだ。このページ開けばまず目につく……はずなんだけど、あいにくイラストがない。解説で我慢してください。

「お前モザイクかかっるぞ！？」

あらまびっくり、神様にモザイクかかってるよ。神様はカッコいいポーズをモザイクかかりつつとりながら言った。

「イェイ☆　かっこいいだろ、この小説はＲ１８です」
「どこがだ！」
「だってぇ、私の正体はまだ明かす訳には行かないんだもん。この小説ではただの“神”と言う“モザイク人間”だと思っていてくれればモウマンタイ！　さて、サクサク話し進めるぞー、ページがない。ま、これはデータ情報だから、本当はページ数は関係ないんだけどー……気にすんな☆」
何かとてもリアルな話を言い出した神、☆付けるの好きみたいですね。とか言ってると神様がまじめな顔して前回説明を始めた。
「ここまでに至る道のりとは！　金色ピアス付けて勇者になっちまったクーガ君が姫さま助けに邪竜倒したら姫さまに殺されあの世に行ったら闇魔さまに生き返れますよと言われなんか邪竜と会えておしゃべりしててからあの世に行きました、めでたしめでたし」
あらま句読点がろくにない、なんて素晴らしい早口解説でしょう、こんな説明だったらない方がましな気もします。
「最後にめでたしめでたしとか付けるな！　オレが死んで話終わりみたいじゃねぇか、勝手に殺すな！」
「はいはい、さっさと購買所に行くぞ！」
「なぜ購買所！？」
「締め切りが迫ってるんだよ！」
そう言うと神はクーガの襟元を掴み、引きずっていった。話しを加速します。締め切りがあったのは過去の話です。

2

神がクーガを引きずっていった先は、いかにも購買所だった。物がごった返しており、何でもとりそろっていますよ、とか言いそうな店。クーガより年は少し下だろうか、学生らしき中国人の少年が店番をしていた。

「Ｗｅｌｃｏｍｅ（いらっしゃい）．」

学校名が日本語の学校にいる癖になぜか英語をしゃべる学生、しかも中国人、わけわからん。気が抜けている、なおかつやる気のない英語を喋った店番に対し、神はハイテンションな日本語で商品を注文した。

「ヘイ、王　江！制服男女サイズ適当プリーズ！」

訂正しよう、こいつはハイテンションな人ではなく不審者だ。英語に対し堂々と日本語で答える方もあれだが、そのまま英語で話す方も凄い、現実でやってる人は見た事がない。間違っているかもしれない英訳付いてます。

「Ｐｌｅａｓｅ　ｃｏｒｒｅｃｔｌｙ．《正確に言ってくれよ》」

「えーっと……ＳＭチックなサイズ！」

「Ｄｏｎ'ｔ　ｊｏｋｅ．《冗談言うな》」

「うん、普通に男子Ｍと女子Ｓね！」

「Ｓｕｒｅ（解ったよ）．」

まるで友達同士のようにテンポよく進んでいく会話、この二人は初対面です。英語と日本語での会話、不思議空間ですね、英語拙くてごめんなさい。店番の中国人は、店の奥の方から制服を二着取り出すと、それをカウンターに置いてレジを動かした。

「１０，０００¥　ｗｉｔｈ　ｔａｘｅｓ　ｉｎｃｌｕｄｅｄ．《一万円、税込みだよ》」

レジに表示された零がやけに多い数字、神は天使のような笑顔を

浮かべた。
「よし、クーガ払え」
「払うのオレかよ、金なんか持ってねぇよ！」
「私もない」
「お前一文無しなのに制服買おうとしてたのかよ！」
クーガの話を聞いているのかいないのか、多分ろくに聞いてない。神は店番に向き直り、クーガを指さしながら言った。
「ヘイ、王　江。こいつの着てる鎧と交換じゃだめか？」
「――Ｉ　ｔｈｉｎｋ……ＯＫ！《まぁ……いいんじゃね！》」
「よし、交換だ！」
「お前ら勝手に何決めて……っちょ、待て、何する気だ、やめろ！」

うわあああああ……

「わーい、制服だー♪」
「制服だなぁ……」
どこでいつ着替えたのかはナチュラルに省略するとして、二人は制服に着替えた。普通のブレザーの制服で、男女共にネクタイ、ひねりナッシング。
「本当に制服だなぁ……」
二人は一応同じ方向に向かって歩いているのだが、それにしてはテンションの差がありすぎる。チョウチョなんか追っかけそうな勢いでとても楽しそうな神に対し、釣りあげてから丘に一週間放置した魚でもここまで死んだ目はしてないんじゃないだろうかと思える目のクーガ。向かう先は天国か地獄かも解らないほど大変な差である。
「なんだよ、元気ないな」
「身ぐるみ剥がれて元気な人間が何処にいる！？」

ごもっとも。
「なんだよー、剣は残しといてやったじゃないかぁ」
「剣自体はどこぞの邪竜に向かって投げ飛ばしたまま放置だから鞘しか残ってねぇよ！」
クーガの言い分はごもっともである。制服にこれっぽちも似つかわしくない鞘がベルトに差してあるのだけれど、剣がないと寂しすぎる。ちなみに鞘自体に特殊効果はない、武器にすればただの鈍器だ。
「あー……あれだよ、制服にあってるから」
「オレが制服着たらもの凄く普通人だろ、主人公らしさのカケラもねぇ！」
「あれだあれ、ギャルゲーの主人公みたい」
「ギャルゲーなんかやった事あるのかよ！？」
「いや無いけど」
「なんの根拠もなしに人を貶めるな！」
「何言ってんだよ、ギャルゲーって言うのはだな、無個性の男が周囲の可愛いぃ～女の子に不自然にモテまくるゲームのはずだぞ、それでその中から一人もしくは複数人を口説く、適切な答えを返せばほぼ確実に落とせるんだぞ。現実にあり得たらパラダイスじゃないか」
「現実にそんな事をしていたら、他の男たちからひんしゅく買いまくるよ、あと主観入りすぎ」
「この小説は、
や　山無し
お　落ち無し
い　意味無し
つまりやおいだ！」
「いきなりなに脈絡のないセリフ吐いてんだお前、大嘘ついてんじゃねぇ、いやお前の言った通りの意味で取るなら別だが。無意味に長いセリフ吐きやがって！」

二人はこの会話中ずっと歩いていて、校舎の目の前まで来た。クーガのツッコミばかりの続く、テンポの良い会話をしながら進んでいた所に、突然声が聞こえた。

3

ガッッ

「やぁやぁ遠からん者は音にも聞けぇ！　ギギギ
キイイ　近くばよって目にも見よ！　イイイィィィィ
イイイ　われこそは名称未定高校1年F組生徒にしてぇ！　ィィィ
ィィィ　女番長ウィクトリアなりぃ！」　ィィィンン

前言撤回多いですけど撤回します、声ではなく謎の破壊音波です。スピーカーがキンキンいってセリフと同化しています、素晴らしい騒音です、しばらくキンキン音が耳から離れません。それでもなお破壊音波を発生させようとする奴がいます、生の声が上の方から響いてくるのでどうやら屋上にいるようですね。またその声は響いた。

「この度はぁ！　……あれ？　マイクーどうしたー？」

今度聞こえてきた声にはキンキン声は混ざっていなかった、生の声しか聞こえてこない。屋上にいるその人はマイクをベシベシ叩いているようだが、音はまったくでない。首を傾げていると、その人の脇から赤いバンダナを頭に巻いた男が出てきて言った。

「このドアホ、壊れたのはマイクじゃなくてスピーカー、いやマイクも壊れてるかもな。お前がバカみたいに叫ぶせいで限界超えたんだよ！」

「え、マジで、マジで！？」

「マジで、オレじゃ直せねぇからな、自分で直せ！」

そう言うと男の方は引っ込んだ。ちなみにこの会話はクーガが現在いる校舎前で聞こえる会話で、何故こんな所まで会話がはっきり聞こえるのか。そんなのは屋上の上にいる二人の声がでかすぎる事以外原因は何もないのだが、とりあえずよく聞こえる。

そのため呆れる、とても呆れる。クーガは、母とか関係ないけど三千里離れた場所を見ているようなとても遠い目をしている。神で

さえも（おいおい何やってんだよオタンコナス……）とか言いたそうな顔で見ている。
そんな二人の様子など知ったこっちゃない上で叫んでいる人は、またマイクを持って叫び始めた。

「この度ぃ！　皆にお願いがある！」

ちなみにマイクを手に持って叫んでいるが、マイクの電源は入っていない、それでも声はハッキリと聞こえてきた。これじゃあ文化祭とかの出し物にある若者の主張とか、その手の類の物にしか見えない。

「実はぁ！　先ほど私が造っていた物が逃げ出したぁ！　よってぇ！　それを捕まえて頂きたい！　名前は≪オマエのハート、勝手に届けちゃうＺＥ☆君“プロトタイプ”≫だっ！　見た目は名前の通り歩くプレゼント！　赤いリボンが目印の白くて可愛い奴だぁ！　捕まえてくれた奴には！　特に褒美なしっ！　奮って捕まえてくれ！
以上！」

演説が終わったのか、屋上からの叫びは終わり、上の人はどこかへと消えた。演説のあいだ中、二人はただ聞く事しか出来なかった。そして、やっと神が唇を開いた。
「うん……ツッコミどころが多すぎて、もうツッコめねぇ……」
神の言葉を静かに聞いていたクーガだったが、突然叫んだ。
「……今の姫様じゃねぇか！！」
「いまさら気づいたよこの子！」
「ひ、姫様がここに……何で、何でこんなところに、しかも女番長！？」
姫様が演説をしているときは至って冷静だったくせに、演説が終

わってからあわてだすアホ。ツッコミとは、たまにすさまじいボケをかます者である（↑信じないように）、その場合普段のボケがつっこまざるおえなくなる。
なんてボケとツッコミの解説をのせている間に、クーガ君はますます混乱していきます、よしもっとパニクれ、ギリシアの神様パンが傍でへばり付いて見守ってるぞ。
「こんなパラレルワールドに姫様が、何で姫様？　あと隣にいた男誰だよ、普通に話してたけど、一国の姫君と同等の立場で会話してるんだよ、誰だよあいつ！？　あ、もしかしてあれか、ここはパラレルワールドだから同じ顔した人間がいたりするのか」
「残念、フツーに同一人物だよ」
「やっぱりそうかよ畜生！」
そう叫んで、地面に拳を叩きつけた時だった。

ぽぴぽぴぽぴぽぴ

なんかが、目の前を走っていった、変な足音を立てながら。クーガは地面に顔を向けていたため姿は確認しなかったが、神がその姿をはっきりと確認した。
それは、プレゼントだった。白い箱に赤いリボンが結んである、やけに派手なリボンが風に吹かれ揺れていた。そして、そのプレゼントは歩いていた、二本の足でしっかりと。詳しくは挿絵をご覧ください、と言いたいところですが挿絵がないので、脳内イメージでお願いします。
そのプレゼントが校舎に入っていく光景を眺めながら、神は呟いた。
「かわいくねー……」
人間の足を写実的に写した足から出るとは思えない、怪しい足音のまま、そのプレゼント（？）は昇降口をくぐり、校舎の中へと入って行った。

プレゼントが校舎の中へ入ったあと、クーガが感情の読み取れない声で尋ねた。
「……今さっき、姫様の言ってたプレゼントが、校舎の中に入って行ったよな？」
「入って行ったねぇ」
神が返事を返すと、クーガは立ち上がり、唐突に走り出した。向かう先は昇降口。神様完全に置き去りにされてる。
「ちょ、おまっ！」
「姫様の勅命だ、あれを捕まえるぞ！」
一応振り返ったクーガに向かい、神は聞いた。
「なんでわざわざ捕まえるんだよ、特に褒美なしって姫さまも言ってたじゃん！」
「伊達に≪　Ｓｉｒ．Ｋｕｇａ≫の称号は受けてねぇ！」
「日本語に直すと≪騎士，久我≫って、ダッセェなおい！　いつそんな設定出来たんだよ！？」
「今さっき！」
「さっきかよ！　……って置いてくな！」
その言葉を言い終わるかどうかと言う所で、クーガは全力で走り出した。一応体は鍛えているので、それなりに速い。クーガの姿はあっという間に校舎の中に消えた。
一人とり残された神は、クーガに向かって手を伸ばしたが、届くわけもなく。
――伸ばされた手が、嫌に虚しかった。

4

「待てやごらぁあああ゛！」

はーっはっはっは、壊れたなクーガよ。……って、擬態語ばかりでは話が通じない。解説開始。

『廊下を走ってはいけません』そんな言葉が走って逃げ出すぐらいのスピードで、クーガは廊下を走っていた。クーガが追っている足の生えたプレゼントは、クーガの３ｍほど前を走っている、こちらも素晴らしいスピードで廊下を走っていた。

歩幅はクーガより狭いくせに、クーガと同じスピードで廊下を走っているプレゼントは、やはり無生物のはずだからか一向に疲れる気配もない。しかし追っているクーガは普通の人間だ、疲れが出てくる。なのでバカみたいな大声をあげながら気合で走っている。

ちなみにただ今は授業中である、それにもかかわらず誰も注意しに来ないとは、変な学校である。

プレゼントは廊下の角まで走り、そばにあった教室へと飛び込んだ。クーガもそれを追って教室に入る。教室の中では世界史の授業が行われていた、のんびりとした関西弁が聞こえてくる。

「プロイセンは漢字の略号だと普なんや……ってそこ、普通とか言ってやらんといてな、かわいそうやろ。この国は今で言うドイツ……ドイツの略号は独やな、あー孤独とか言ってやらんといて。その言葉はイギリスにい言ってやりや、栄誉ある孤立やっとった国さかい」

黒いスーツを着ている教師は、チョークで達筆すぎて読めない字を黒板に書きながら授業を進めている、地面まで届きそうな黒い長髪にチョークの粉がたくさん降りかかっていてみっともない事この上ない。その上、教師の頭から生えている金色の角が、たまに黒板にすれるのだ、そのたびにガラスを引っ掻いたような耳触りな音がなる。

……クーガはいい加減にツッコミを入れた。
「また邪竜かよ！」
はいツッコミどころ間違えたー、どうやらこの二人知り合いだったようですね。
「ファヴニルって呼んでな、授業中は静かにせいや～」
なんかいつだったか言った覚えのあるツッコミに対し、ファブニルとか名乗った教師はゆるい注意をした。注意をまったく聞いていないらしいクーガは、教壇の前まで来ると息を深く吸い、一方的に話し始めた。
「なんでお前がここにいるんだよと前にも聞いたような気がするが今またあえて問うぞまぁこの話なんだか世界観設定むちゃくちゃみたいだから
パラレルワールドで別人だといっても一応信じられるけどファヴニルって名前に関してはそれ本名だったよな忘れてたけどだからつっこまないでおくそれにしてもその変な格好はなんなんだよ黒スーツってなんだよマフィアかお前黒スーツ着て関西弁話してんじゃねーよ違和感バリバリだからと言うかお前スーツ似合わねぇよこないだ来てたみたいな変な服着てればいいだろ何であえてスーツ着ちゃうかなここでやっぱり後で服変えてこいそうしろそれとなんでお前が世界史の教師だ何であえて世界史の教師だ微妙な教科選びやがって普通に角生やしたまま授業やってんじゃねぇよ黒板にすれてキィキィうるせぇんだよ字も達筆すぎるよそれあんたは寺の住職かあと頭にチョークの粉かかりまくってるよ黒づくめだから余計に目立つそれ以前に何で教師なんだろうなお前が年の功ってやつかぁあー肺活量の限界！」
いきなり話し出したかと思えば、いきなり息を切らしているのだから、たしかに目を丸くしてもおかしくないだろうな、しかも句読点もろくに無いからちゃんと聞き取れたかどうか。目の前にいるファヴニルはまぬけ顔をさらしている。一気につっこみすぎたせいで息は切れているが、クーガはまだファヴニルにつっこまなければな

らない事がある！
「はーい、先生の黒スーツは萌え要素としてはアリだと思います」
つっこもうとした所に思わぬ所からの横槍、背後にいる見知らぬ生徒の言葉。クーガはそちらを先につっこんだ。
「お前はいわゆる腐った人間か！？」
その生徒は見た目には活気あふれる女子生徒だが、教科書の下に少しだけ隠してあるＲ１８とか言いそうな怪しい原稿が、それを台無しにしている、その生徒は原稿にペン入れをしながら返事を返してきた。
「そうですとも！」
「くたばれ！」
「うっわ、偏見だ」
ちなみに筆者は腐敗していようが、いなかろうが気にしない質です。
その不振な生徒が原稿に集中し直すと、別の女子生徒が手をあげた。ファヴニルがその生徒を当てた。生徒はちゃんと起立して発言した。
「先生の授業はちょっと嫌なところもあるけど、解りやすくていい授業です、教師としては間違ってないと思います！」
「は、はぁ……」
どことなく天然の雰囲気を漂わせている割には、まじめな事を言う生徒である。ドぎついボケしか相手にした事がなかったクーガでは、ツッコミになれなかった、皆さまつっこみたければセルフで突っ込んでください。
「おい、そこの乱入者、一つ言いたいんだけどよ」
今度は少しガラの悪い男子生徒が発言をした、どうやらファヴニルに関する事ではなくクーガに関する事らしい。その男子生徒は言った。
「てめぇはさ、あそこにいるプレゼントを追っかけてきたんじゃ

ないのか？」
そう言った男子生徒が指した指先は、中庭だった。ぽぴぽぴ足音を立てながら、プレゼントがのんびり歩いている。
親切に教えてくれた男子生徒を見つめ、クーガは笑っているような怒っているような、変な表情で固まっていた。
……忘れていたらしい。
何とも言えない空気の漂う教室のドアが乱暴に開かれた、ドアを開いた人物は息も絶え絶えに言った。
「ここ……かいだん……なげぇ……クーガのアホぉ……」
モザイク人間”神”、体力ゼロで登場。ちなみにこの教室は二階にある、階段も別に長くない、たぶんこの人は体力の基本値が一ぐらいしかなかったんだろう。
神が「クーガのアホ」と言うか言わないかと言う所で、クーガは窓の外へと身を躍らせた。二階から飛び降りるなんて危険なので、よい子はマネしないように。
「あ、待てよオイッ！」
あわてて窓にかけよった神だが、クーガはすでに地面に着地していた、足を抱えて悶え苦しんでいる。しかし暫くすると復活して、中庭に向かって走り出した。先程と同じシチェーションである。
「おい、待てよゴラーッ！」
――神の叫びは、虚しく響くばかりだった。

5

「待てやごらぁあああ゛！」

シーンの使いまわし。クーガはまたプレゼントと追っかけっこを始めた。何で叫んでるかは少し前のシーンをみて思い出してください。中庭は廊下と違って入り組んでいるので、クーガはそれを利用しプレゼントを追い詰めていた。

徐々に、じょじょ～にプレゼントの距離を縮めていく。３ｍだったところを３０ｃｍまで縮めたのは大変な努力だと思うよ、クーガの息はとってもものすっごくすばらしく上がってるけどね。

その時だ、クーガの目の前を大きな蒼白い狼が横切った。突然の事に対処できず、クーガは全力疾走でその狼に突っ込んで行った。

「ぎゃあああああ、あぶねえええぇぇ！」

ぶつかる寸前、クーガの叫びが聞こえたのか狼はクーガに視線をやったが、特に動きもしなかった。そして、クーガは狼に体当たりしてしまった。

はずだった。

スカッ

（……すか？）

クーガの思考は固まった、それなりの衝撃が体に来るであろうと思っていたのだが、衝撃どころか狼に触れた感覚さえなかった。

クーガは狼の体を突き抜け、そのまま足を引っ掛け派手に転んだ。面白いぐらいに転がっているクーガを、狼は黙って見ていた。体中に痛みを覚えながらも、クーガはその狼の事で頭がいっぱいだった。

（あの狼、体がなかったぞ。立体映像？　でも動いてたよな、そんな立体映像を映すような機械ないし。明らかに意思がある動きしてるよなあれ、リアルタイムで動いてるよなあれ。そういえば体突

き抜けた時になんかヒヤッてしたような気が……）
勢いが収まり、地面に転がっていたクーガは、一つの結論にたどり着いた。
「……オバケ？」
オーケイ、ジョミー、逃げるぞ！　誰だか解らない人に心の中で合図を送り、逃げようとしたクーガの背中に、聞き覚えのある声がかかった。
「あぁ、お久し振りですね。貴方もそう云う服を着て居れば、多少は正常な人間に見える」
この無駄に丁寧かつ毒の入った口調は！
「何で閻魔様がいるんだよ！？」
「閻魔様では無く、山田とでも呼んで下さい。偽名ですが」
「偽名かよ、しかも閻魔の山田って……どこかで聞いたような」
染めてるんじゃないかと思うぐらい黒い髪に黒い目を持った美少年、閻魔様とか呼ばれていたがどこが閻魔なのか。閻魔なんて言うと私的にはヤマの山田より、部下の鬼にイカとか呼ばれてる大王を思いだ……げふんげふん、この話は関係ないですな。
「閻魔様何でここに、つーか閻魔様が地上に来ていいのかよ！？」
「だから山田と呼んで下さいと言ってるじゃないですか、休暇中ですよ」
「休暇あるんだ！」
言われてみれば、山田と名乗った少年の服装はどう見ても遊んでいるようにしか見えない服装だった。水色のえりのセーラー服に同色のベレー帽、そして日傘。セーラー服と言っても女学生の着ているスカート型では無く、本来の姿であるズボン型である。
ぶっちゃけていうと、似合っていない。黒すぎる髪と白すぎる肌、そして酷く大人びた表情をしているこのマセガキは、どう見てもインドア派なので、活動的な服が似合わない。味気ない黒服でも着てればいいと思う。
山田さんは服装と合っていない、人を嘲るようないっそすがすが

しい表情を浮かべ、言った。
「有るのでは無く作るんですよ、仕事を早く片付け早く片付け……捻出した時間を休暇としているんです」
事情は解らないが、大変な生活をしているらしい。そんな事を言われてしまったら、生返事ぐらいしか返せない。クーガが対応に困っていると、何の前触れもなく肩に寒気を感じた。あわてて自分の肩を見ると、そこには半透明で群青の鴉がとまっていた。肩に何かがとまっている感覚はない、得体の知れない冷たさがあるだけ。
「……！？」
「魍（すだま）、無断で人様の肩に止まっちゃだめだよ」
山田さんがそう言うと、その鴉はクーガの肩から離れ、山田さんの肩にとまった。どんなに見直しても、やはりその鴉は半透明だった。言葉を失っているクーガに、山田さんが説明を入れてくれた。
「この鴉は僕の式神ですよ、先程の狼もそれです。僕が兎や角命令しない限り無害ですから安心して下さい」
とやかく命令されたらどうなるんだろうね。そんな事を気にしているクーガに、山田が言った。
「所で、貴方はあれを追い駈けて居たんじゃないですか？」
そう言って、山田さんが指さした先には、のんびりと歩いているプレゼントが。「あ～、あのウザイがきやっといなくなったぜ」なーんて考えてるかどうかは知らないが、意気揚揚と歩いている。
「……また忘れてた！」
「やっぱり」
記憶障害があるとしか思えない物忘れの量である。クーガはほとんど走り駈けながら言った。
「こうしちゃいられねぇ、オレ行くから！」
「待って下さい」
追い駈ける気満々だったところにかかったストップ。危うくズッコケかけながらもクーガは立ちどまり、振り返ると、山田さんが悪戯っぽい微笑みを浮かべて言った。

「元はと言えば僕が声を掛けた事で開いた距離です、僕が少し御手伝いしましょう」
「マジで！？　つーかそんな事出来るのかよ」
「いわゆる金縛りと言う奴ですよ。まぁ出来る限り止めて置きますが、動く無生物……なのかなぁ？　あんな物にかけた事は無いので、実際どれ位止めて置けるかは解りませんよ？」
「全然オーケー、ぜひともやってください！」
「了解しました」
山田さんが返事を返すとほぼ同時に、草むらから半透明の大蛇が現れた。クーガはかなりビビッたが、山田さんが普通に冷静なので、多分さっき言っていたシキガミの類なのだろうと思い、警戒はしなかった。
「蛟（みずち）、話は聞いてるよね？」
その蛇は山田さんの言葉を理解しているらしく、首を縦に振った。それを確認すると、クーガの方に向きなおり、薄い笑みを浮かべながら尋ねた。
「準備はいいですか？」
「おう」
プレゼントは相変わらずのんびりと歩いている。クーガは視線をプレゼントにしっかりと定め、いつでも飛びかかれる準備をした。
「じゃあ止めますよ……三、二、一」
山田さんは、特にこれと言って何かをおこなった素振りは見せなかった。しかし、変化は明らかだった。
「零」
その一声が引き金だったかのように、プレゼントはピタリと動きを止めた。それと同時にクーガはプレゼントに向かって走り出した。
プレゼントに迫るクーガ、プレゼントはまったく動かない。距離はどんどん縮まっていく、あと１ｍ、あと５０ｃｍ、１０ｃｍ。
あと１ｃｍ……！
「……取った！」

クーガはプレゼントに触れた、その手はプレゼントの側面に当たり、そのまま手を握りしめた。クーガは確実にプレゼントを捕まえた、そう思った。しかし、プレゼントは掴めなかった。

驚愕を覚えながら瞬きをすると、そこにプレゼントはすでにいなかった。顔を上げると、すでにプレゼントは遥か彼方に。

クーガが掴んだプレゼントは、残像だった。

6

「……ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

「うわー、早いですねー」

クーガの叫びと山田の呑気な言葉がほぼ同時に響いた。金魚のように口をパクパクさせているクーガの代わりに、山田さんが冷静に説明を始めた。

「やれやれ、流石あの人の造る物だ。休暇モードで力が弱かったのは認めるけど、僕の力にまで耐性を付けているとは……本当に何がしたいんだろうあの人、中身を守るために完全防御陣でも敷いて在るんだろうか？」

あの人あの人と言っているのはウィクトリア姫のことである、なんで山田さんが姫様の事を知っているか、それには深い訳があるのだがどうにも言えないので話さない！

「いや、オレはそんな事よりあの異様なスピードにつっこみたい！」

地の分が変な解説をしている間に正気を取り戻したのか、やっとまともにツッコミを始めたクーガ君、山田さんは親切に答えてくれた。

「あの人に創れないモノなんて無いんですよ。あの位のスピードなら未だマシですよ、いつだったか『光の速度を超えるスクーターを造ってやる』とか言って本当に造りましたからね。ちなみにそのスクーターは『正に危険な乗物の極み、資源の無駄使いだ愚か者』と言われ姉殿下に廃棄されていました」

「姫様の姉上って……確か邪竜にさらわれたんじゃなかったっけ？」

「その姉上様とは違う方ですよ」

説明をちゃんと入れてくれたこと事態は親切だが、内容はいまいち親切ではなかった、解りづらいんだよコノヤロー。どうやらクー

ガが知らない人物がいるらしい、なんで山田さんがそんな事を知っているのか、それは聞いてはいけない。そして気にしてはいけない。
「居たーッ、いい加減に逃げんのやめろドバカクーガ！」
何て事を言っていたら神がクーガを追ってきた、懲りない人だね。神の声が聞こえているのかいないのか、またはシカトしているだけなのか、クーガは山田さんに言った。
「オレはプレゼントを追うから、じゃあな！」
そして、クーガはプレゼントの走り去った方向へと走って行った。やっぱり神は置いていかれている。
「だーかーらー、いい加減にしろこの糞馬鹿野郎がーッ！」
――二度あることは、三度ある。

6（後書き）

累計アクセス人数があと7人で１０００人。
ＰＶは５０００を突破しました。

7

「ぐォラいい加減にせんかい！」
「ぐえっ」
どこからどうやって降って来たのかは解らないが、とりあえず神がクーガの上に降って来た。当然のようにクーガを踏みつけて。
「どこから降って来たんだよお前！？」
「そのへんの説明はアニオタの神秘と言う事で」
「つまり科学的な説明は一切なしと。わざわざオタをつける理由が解らないが、それは置いといて。いい加減に降りろ！」
「やだ」
アホな事を言う神を強引に叩き落とし、立ち上がって埃をはらっていたクーガに、神は転がったまま叫んでいた。
「ブッちゃけて言えば強制召喚だよ、既に長すぎるから早く終わらせないとな！」
クーガは酷薄な笑みを浮かべながら、落ち着いた口調で言った。
「そうですか、だったらセリフの長い貴方を強制退去しましょう」
「待って、だいぶお役に立てるから待って！」
一瞬で立ち上がり、クーガのえり元をがっしり掴みながらそう言ってくる神に、クーガは振り返らずに言い返した。
「神が役に立った覚えがないんだがな」
「プレゼントは校庭に生えてるでっかい木の下に向かってる！」
「よし行くぞ」
歩き出したクーガ、神はえり元を掴んだまま引きずられていた。どれだけ体重が軽いのか、いや体重あるのかなこの人？
「マジでいるよ……」
「私が出任せ言うと思ったか？」
「もちろん」

「いくらポジティブ思考の私でも悲しくなってきたよ……」
番外編の分際で本編より長くなりそうなので、一行で移動したことになっている神とクーガ。彼らの視線の先にはプレゼント、校庭を呑気に歩いている。二人はいま草むらの中にいる、典型的なバレバレの隠密行動。プレゼントに見つかるとすぐに逃げられるので、こうして身を隠し捕まえる機会をうかがっている訳だ。まぁ、はたから見たら「なにやってんねんお前ら」と言った状況なんだけど。
「さっき言ってた木ってアレか？」
「そうアレだよ、あの桜の木。あんなに葉が生い茂ってるのに、羽虫がすごく頑張ってるから毛虫いないんだよ、あの木。しかも根元には草花が、シエスタに最高」
「シエスタって……昼寝かよ」
そんな会話を繰り広げながら、徐々にプレゼントに近づいていく。まだ飛びかからない、なぜって隙がないから。どうやらプレゼントはその桜の木に向かっているらしい、二人もそれに続く。
桜の木に近づくにつれ、その木の大きさが解ってきた。大樹と呼ぶにふさわしい立派な木で、またとても美しい木でもあった。
その木の根元で、昼寝をしている人がいた。真っ白な服を着た男で、熟睡している。神がシエスタに最高と言っていたのは本当らしい。プレゼントはその人に向かっているようだ。
「あれー、プレゼントが届けられちゃうよー？」
「姫様……逃げ出したとか言ってたよな、あれ中身入ってたのか？」
「さあ……？」
とりあえず見守る事にした二人、プレゼントはぽぴぽぴ足音を立てながらその人の目の前までやってきて、膝の上に足をかけた。
瞬間、その人はプレゼントに目にも止まらぬ裏拳を食らわせた。
ぐしゃ

プレゼントは見るも無残に潰れ、クーガの足元に飛ばされてきた。はっきりと拳の後が残っているプレゼントを見つめながら、クーガは呟いた。
「……え、どう言う展開？」
「多分、睡眠妨害されたから殴ったんじゃないかな。アルちゃん寝るの大好きだから」
「アルちゃんって……あの人そんな名前なのか？」
「本名は秘密と言う事で」
なんだかよく解らない展開になった。もしかしたらプレゼントはアルちゃんに向かっていたのではなく、本当に桜の木に向かっていたのかもしれない。真実は闇の中だけれど、とりあえずプレゼントはボロボロだ。
「どうしようこれ？」
神が指差した先にあるのは、潰れたプレゼント。なんだか足がヒクヒク動いててとても怖い、まだ生きているようだが、死にかけだ。
「いや、どうしようと言われても……中身どうなってんだろうな？」
「うっわ、それめっちゃ気になる」
すると神はクーガの肩を叩き、素晴らしい笑顔を見せると、反対側の手の親指を立てて、言った。
「ア・ケ・ロ♪」
「たまには自分から行動を起こしてみようという気にはならないのか？」
「ア・ケ・ロ♪」
クーガが何を言おうと、神は同じ答えしか返さない気らしい。クーガは慣れているせいであきらめが早く、素直にプレゼントのリボンに手をかけた。リボンは簡単に解かれていき、ふたは簡単に開けるようになった。
鬼が出るか蛇が出るか、ここまで来て「人のプレゼント勝手に開けていいのかよ」といまさら言う人はいないだろう。クーガは心を

決め、プレゼントを開いた。

8

……ハロー

それは、あいさつをするかのように手を上げていた。
プレゼントをあけると、そこにはプレゼントがいた。死にかけていたそと身と違い、とても元気そうだ。足しか生えていなかったそと身と違い、中身には手も生えている、やっぱり気持ち悪いぐらいリアルな手だ。やっぱり挿絵はないので脳内補完計画。
もうどうする事も出来ないクーガは、ただひたすらに固まっていた。予想出来たかもしれないが実際に起こるとシュールすぎる光景に、神も固まっていた。
そして、プレゼント中身はクーガの顔をけり飛ばしどこかへと走り去って行った。足音はピコッ、とかいった。

プレゼントにけり倒され、仰向けに倒れているクーガ。プレゼントの動きを、茫然と眺めている神。もう何から突っ込めばいいのか解らない、ツッコミ担当が倒れているのだから、こう言う時はボケでも突っ込むのが定石、しかしどこから突っ込めばいいのか解らない。全部にツッコミを入れようとしたら、何ページか前にクーガが行っていた肺活量の限界を用いないと無理だろう。
なんの言葉もないまま、クーガは立ち上がった。そしてプレゼントの走り去った方向へ歩いていく。つっこめない時は何もつっこまないのが得策だ。立ち去ろうとするクーガに、神は声をかけた。
「オイ……どうする気だ？」
「捕まるまで追う、こうなったらとことん追い詰めてやるよ」
それだけ言って去ろうとするクーガに、神はなおも言った。
「またプレゼントの中はプレゼントってオチかもしれないぞ！」
「別に、知ったことか」

そう言ったクーガは、一度振り向いて神に尋ねた。
「……お前はさ、最初からこの展開を知っていたのか？」
「いいや、ここまで酷くなるとは……だれも予想してなかったよ、プレゼントを追いかけるエンドレスになるとは……ね」
「そうか」
クーガはプレゼントを追いかけ、走り始めた。神はまた置き去り、何度でも繰り返す、物語の外側は語られないのだから。
走りながら、クーガはつぶやいた。
「どおりでオチがない」
それを言われちゃあ終わりなんだよね。
おわり

1

オレの名前は久我　朱彦、クーガ・グリムゾンと呼んでくれ。
オレはとある世界で勇者をやっていた。
あの金色のピアスをつけた瞬間にオレの運命は決まった。神の声を聞くことの出来るオレは勇者となり、ウィクトリア姫を助けるため旅立ち、とうとう邪竜ファヴニルを倒した。この前もこんな話してたな。
……そのあと、オレは姫様に殺された。そう、邪竜に殺されたわけじゃない、何の弾みか解らないが、邪竜はその場の勢いに任せて殺してしまったあとだ。何でこんな事になったのか、オレが教えて欲しいよ。

そして、死んだオレはあの世に来た。
そこには黒くて怪しいガキにしか見えない閻魔様がいて、閻魔様によるとオレはまだ死んでいないらしい。心配停止状態らしいが。色々と事情があるそうだ。閻魔様としばらく話していると、突然肩を叩かれた。
なんと邪竜だよ。
あの世で邪竜とあっちまったよ、わぁ吃驚。……そんな程度で片付く吃驚ではないが、邪竜とも呑気に会話始めちゃったんだよな、オレ。ところで会話しやすくする為に姿を小さくするのはいいが何で擬人化しちゃうんだよ、おかしいだろ、やっぱりあんなやつ邪竜じゃねぇ！
……取り乱して悪かった、邪竜と閻魔様と呑気にお茶を飲んで、閻魔様から天国か地獄か好きな方を選べと言われた。選べちゃう事にまた吃驚なんだが、常識的に天国へ行くに決まってるだろうと言う事で、オレは天国へと向かった。

いつも言ってる事だけど、オレは人とは違うところがある。
勇者だとかそう言うのは関係なしに、決定的に違うところがある
んだ。あのピアスをつけた瞬間に知った、いや勝手に教えられた。

オレは、
自分が小説の主人公だと知っている。

2

気が付けば、神は誰かに向かってと言う様子でもなく、一人でべラベラと喋っていた。

“前回の学園モノ、学園と言っておきながら学園である必要性がろくにないミラクル、限りなくブラックに近いグレーの小説、ブラック判定が来てもおかしくないものでしたね。見どころと言えばやはり邪竜の授業でしょう、あえての世界史、異世界の住人の教える歴史、すごく不安になりませんか？　ちゅーか、いつ教員免許を取ったのか……永遠の謎を残したまま、多分決して続かない物語にございます”

「そんな謎、気にするなよ……」

自分の声に覇気がない事がよく解る、神はそのまま話し続ける。

“そしてすべては無かった事に、思いつきの急ごしらえは儚く消える。ストーリーに影響は及ぼさない”

「じゃあここも思いつきの急ごしらえなんだな、そうなんだな？」

“いいえ、ここは地盤のしっかり安定した、ずいぶん前からある場所にございますよ？”

「ここが……？」

茫然と、オレは立ち尽くしていた、どうしたらいいのか解らなかったのだ、オレは確かに天国の門とやらをくぐったはずだ。

なのに……ここは何処だ？

立ち尽くすオレの前を何人かの人たちが通り過ぎて行く。オレがいる場所は大通りらしく人通りが多い。とりあえずあたりを観察してみると、道沿いにある建物は木造が多い。道は舗装されておらず、砂っぽい道だ。天気は悪い、今にも雨が振り出しそうな程に淀んだ空である。道を行く人はどれも声をかけ辛い強面ばかり、男ばかりだ。

……どう見ても治安の良い場所じゃない。何と言うか……カウボーイが決闘を始めてもおかしくない雰囲気のある場所だ。古い映画に出てきそうな感じの。もっとも、カウボーイの決闘などと言うみばえの良い物より、ヤクザ同士の喧嘩だとかの方がよく見られそうな場所だが。

どう見ても天国ではない場所で、オレは立ち尽くしていた。

「ここが……天国？」

“天国へようこそ！”

神が明るい声で言った。けれどそんな言葉聞こえやしない。

「……」

“なんだよ、三点リーダだけのセリフを吐きおってからに”

「何処だよここ……？」

“だから天国だって”

いや、どう見ても天国じゃないだろ。せいぜい地獄だ、地獄行きになってそうな人ならたくさんいるし。でも地獄にも見えない、やっぱり何処かの治安の悪い街にしか見えない。もしかしたらオレはもう生き返ったのか？

それで、別の世界の適当な街に落とされたのかもしれない。うん、あり得そうだ。

“別にそう言うわけじゃないんだけどなぁ……、ここは悪っぽいけど気はいい人が集まるコミューンだよ、ちなみにコミューンはフランス語だ”

（コミューンって……確か『共同自治区』って意味だよな。なるほど、そんな話し何処かで聞いたことあるぞ）

コミューンについての説明をすると、神は何故だか嬉しそうにあの世についての説明を始めた。

“死人を一カ所に集めたらシャレにならん事が色々あるからこうやって……”

突然神が黙った。珍しい、神は何時いかなる時であれ喋りたけれ

ば意地でも喋っているのに、深夜にいきなり喋り出すからとても迷惑だ。首を傾げていると、神は独り言を言った。

“ああそっか……こっちの理はよく解らんなぁ。なるほど、こう来るか。私いらねぇじゃん、どうしよ影が薄くなる、レギュラーのぴんち”

（いきなり何言ってんだよ？）

相変わらず首を傾げていると、オレの前を通り過ぎていくはずの人が突然立ちどまった、そしてオレに向かって歩いてくる。神が言った。

“ほれ、案内人だ”

逆光でよく見えないが、とりあえずその人が真っ赤なドレスを着ている事は解った。その人はオレの目の前まで来ると、色っぽい声で言った。

「そこで立ち尽くしてる変なぼっちゃん。ちょっと話があるのよ。立ち話もなんだし、一緒にお茶でもしない？」

2（後書き）

今日は二回も自滅した。
バドミントンで壁打ちしようとしたら、デコに飛んできた。
バックしたら、机に激突した。
以上、作品とは全然関係の無い話。

3

「ふ～ん。アンタ、やっぱり新入りかぁ」
「は、はぁ……」
その人に連れられて来たのは、人相の悪い人が行きかう酒場だった。明らかにお茶と言う雰囲気ではない。その店のカウンター席にオレはいるのだが、全く落ち着けない。オレにアイスココアを出して来たマスターも、図体がでか過ぎて怖い。
オレをここまで連れてきた人。隣に座っているその人は、真っ赤なドレスがよく似合う長髪の美女だ、色っぽい声は地声のようだ。こんな目立つ美人一度見たら忘れないだろう、つまり一度も見たことがない、初対面だ。その人は昼間から、異国の言葉で銘柄の書かれた、よく解らない赤ワインを飲んでいる。そしてワインを傾けながらオレにいくつかの質問をしてくるのだ。そしてオレは適当に返事を返す、それの繰り返しだ。
「それで、アンタは半分死んでてその内生き返る予定だと」
「まぁ、そうなってます」
「そう言ってる奴は大概生き返らない」
手に持ってたコップが軋んだ音を立てた。名前も知らない人にいきなり告げられたショッキングな言葉。さっきからこんなやりとりが続いている。ショックを受けているオレを見てニヤニヤしていると言う事は、どうやらこの人、性格がかなり悪いらしい。気が変わったのか、その人はオレに励ましの言葉をくれた。
「私はアンタの行く末なんか知らないよ。私はそう言って生き返った奴を一人も知らないけど、生き返るなら生き返るさ。そんなに気にしなくてもいいよ」
いくら性格が悪くても美女に励まされて嬉しくない訳がない。しかし、オレはこの人の名前すら知らないのだ、嬉しいより先に不信感が募る。という訳で尋ねてみよう。

「ところであなたの名前は？」
「ああ、まだ名乗ってなかったね。私はここら辺の野郎どもからは『姉さん（あねさん）』って呼ばれてる。好きに呼ぶといいよ」
名前教えてくれないのかよ！　と内心で突っ込むが、これ以上聞いても教えてくれないだろうと思い、オレは黙る事にした。質問は終わったらしく、黙っているオレを無視し、姉さんはオレの状況を整理してスラスラと、とても軽い調子で述べた。
「アンタはいま心配停止で死んでるに等しい状態だが、一応生きている。こっちで二十四時間過ごしたら生き帰れる手筈になっているけど、これと言った確証はなく、実はもう死んでるんじゃないかと自分でも疑っている。あと、ここが何処なのかもよく解ってなくて、茫然としてた所を私に捕まったと。フツーだねぇ」
「普通なのかよ！？」
「もっと変な奴なら唸るほどいるよ。ほら変人代表のお目見えだ。」

3（後書き）

シルバーウィーク、休みじゃねぇ。
何やら日記となりそうな雰囲気です。

4

姉さんが入り口を指さした、それとほぼ同時に酒場の入り口が勢いよく開かれた。

一瞬、老人が入ってきたのかと思った。なぜならその人影は身長が低く、髪も真っ白だったからだ。しかし違った。その髪は確かに白髪だったが、老人のように精気のない髪ではない。若々しい輝きがあり、染めてもあんな白にはならないだろう。何より印象的なのがその目だ。いわゆるヘテロクロミア、片目は紅く、もう片目は金色。恐ろしい事に両眼とも瞳孔が紅で縦に裂けている。どう見ても人間の目ではない。

その人物はこちらに向かってまっすぐに歩いてきて、なんとオレの隣に座った。近くで見れば、その人物かなり若い。オレより何歳か年下だろう、少年と呼べる年齢だ。しかも動作がいちいち子供っぽく、その上童顔なので余計に若く見える。目の色は不気味だが、それを除けばクリっとした目の可愛らしい子供である。

その少年は明るい声で、マスターに言った。

「マスターさん、きのみジュース一杯！」

……きのみじゅーす？

「きのみジュースってなんだよ！？」

「これ」

いきなり突っ込んできたオレに戸惑う訳でもなく、出てきたジュースを指さした。マスターが一瞬で出したのは普通のミックスジュースだ。フルーツの事をきのみと言ったんだろうか、普通言わないだろう、ミックスジュースって言えよ。少年は輝かんばかりの笑顔で言った。

「これおいしいんだよ、なにせきのみから出来てるから。きのみは完全食品だ！」

返す言葉がない、いくらなんでも突っ込みきれない。こいつに対して完全に突っ込むにはキング・オブ・ツッコミでも呼ばないと無理だろう。こいつオレにどうしろって言うんだ、スルーしていいか？

“だめ”

（だめなのか）

いきなり入った神のダメ出しに対応していたせいで、一瞬ボーッとしていたオレを少年は不思議そうな顔をして眺めてから、首を傾げて尋ねてきた。

「そう言えば君だれ？」

「……あ、ああ。オレは久我　朱彦……クーガ・グリムゾンって呼んでくれ。あんたは？」

オレの返した質問に、その少年は胸を張り、また笑顔を浮かべて誇らしげに答えた。もう目がどのこうのとか、どうでもよくなってきた、見た目より中身がヤバイよこの子。

「忘れた！」

「なんだそりゃ！」

少年は脳味噌のネジが何本か外れてんじゃないだろうか、と思えるような顔をして首を傾げていた。なるほど、さすが変人代表、どう対処したらいいか解らない。この顔を前に何を言えばいいんだ？

などと思いながら困っていると、オレの代わりに姉さんが解説をくれた。

「ここにいるとなんか記憶が抜けてくらしくてね、その子自分の名前を真っ先に忘れちゃってんのよ、好物とかは忘れてないのにね。皆には白髪だからってシロ君と呼ばれてんのよ」

「ああ、なるほど……って、ここにいると記憶が抜けてくのか！？」

「大丈夫、一日で記憶が抜ける奴なんて稀だから」

稀って言ったな、マレって。抜ける奴もいるって事だよな、なんか心配になってきたぞ、オレここに２４時間いなきゃいけないんだからな。

“おまえ忘れっぽいからなぁ、一日で記憶全部抜けるかも”
（抜けてたまるか）
“痴呆人間クーガ”
（変な称号付けてんじゃねぇ、痴呆じゃなくてちゃんと認知症と言え！）
“あ、認めた”
（ちっがーう。オレが訂正したのは痴呆の事だ！）
もう飽き飽きしてきたこのコント。もう長い事やっている気がする、正直いい加減にしてほしい。オレの内心での口喧嘩を知る由もないシロ君とやらは、とても素直に尋ねてくれた。
「何で久我じゃなくてクーガって名乗ってんの？」
勢いよく立ち上がったので、椅子が倒れた。けれど、今のオレはそんな事も気に介さないほど興奮していた。そんなオレに驚いているのか引いているのか、シロ君は目を丸くしてオレを見ていた。

4（後書き）

出かける必要がなかったのに出かけてしまった、結構悲しい。

5

「よくぞ聞いてくれたっ！」

思わず口をついた言葉。そうだよ、その説明こそオレがいままで一番説明したかった事なんだ、そして自分からは絶対に持ち出せない話。言えないようにされているのだ、このバカ神に！

“バカ神って失礼だな、バカ神って！”

神の言葉なんか知った事か、クソ食らえ。小説始まってからずっと説明したかったけれど機会がなかった。読者の皆さん、読み飛ばしたくなるだろうけどよくよく聞いててくれ！

「オレは、いたって普通の子供だった。平凡人生まっしぐらだ。このピアスをつけた時からだ、平凡なはずのオレの人生は世にも奇妙なモノになちまったんだよ。ピアスをつけた時に聞こえてきたこの声、神だとか名乗ってるから神って呼んでるけど、どう考えても神らしくないこいつだ。オレ以外の人間にこいつの声は聞こえないから、説明なんかろくに出来やしない。こいつはオレが親から付けてもらった名前を『なんかつまんない』と言う理由で改名しろと言いだした。それで出てきた案がクーガ・グリムゾンとか言うどこの戦隊ヒーローの名前だと言いたくなるような名前だよ。当然オレはそんな事する訳ねぇだろ、と答える。そしたらこのバカ神『じゃあお前の人生徹底的に不幸にしてやる！』とか言いだしやがって、しかも実行し始めやがった。オレは当初神の言う事を聞かず、街をぶらぶら歩いた。そうしたら頭上から洗濯物とかバケツの水とか植木鉢とかが降ってくるし、道を歩けば目の前を黒猫が横切り、チンピラに絡まれ、犬の首輪が偶然外れて犬に追いかけられる。本を買えば落丁ばっかりで読めない、弁当を買えば中に虫が入ってる。剣の練習をしてると靴紐が切れたり、剣が折れたり。凄く地味な嫌がら

せだろう、オレは負けるものかと一週間ぐらい粘ったな。さすがにそんな事が続くと気が滅入ってきてな、いい加減にオレも折れた。それで『こんご名乗る時は「クーガと呼べ！」と言うようにするんだぞ！』とか言う約束をさせられ、破ったらお前の頭に雷を落としてやると脅され、実際ちょっと落とされ、仕方なく従わざる終えなかった。解るか？　この理不尽さ！　これと言って悪い事をした訳でもない普通の人間が、いきなりこんな事に巻き込まれたんだぞ。どう思うよ、もはや笑えてくるこの人生！」

語りを終えたオレを、酒場にいる全員が見ていた。それもそうだ、いきなり立ち上がって身ぶり手ぶりも豊かに、しかも大声で自分の身の上話しを始めたら、だれだって目がいくだろう。ドン引きした視線でオレを見ているに違いない、少なくともかなり驚いているはずだ。

……どうしよう、明らかに２４時間経ってないけど、意外と時間が経ってて生き返る時間になってたりしないかな？　穴があれば隠れたい気分なんだが、穴に入って漆で蓋をしたいんだが、そして蓋を溶接したい。

何もしたくない、しかし何もしない訳にはいかない。目の前にいるシロ君の顔をさりげなく除いてみると、ただでさえ大きい目をさらに見開いて凄く驚いた顔をしていた。ああ、やっぱり……。この後どうしよう……。

シロ君は数回瞬きしたあと、大きな目をキラキラさせて言った。

「なにそれ、すごーい！　すごい傍若無人！　あの人みたい！」

……は？

想像していた言葉とはだいぶ違う言葉に、オレの思考は停止した。話に乗ってきたよこいつ、へんな感想言いやがった。シロ君の言葉に続き、酒場にいたほかの客も口々に言いだした。

「なんかつまんないって……名前につまんないって言われたのかよ」「許否ったらお前を徹底的に不幸にしてやるだってよ」「うわ

酷ッ」「つーかなんだよその地味な不幸……」「徹底してるのは確かだよな」「クーガ・グリムゾンって……ブッ」「おい、笑うなよ」「お前も苦労人なんだな……」「キョウの方が苦労人じゃねぇの？」「いや、レクさんはおとなしいから」「笑えるけど笑えねぇよその人生」「よく頑張ってきたな、その気持ち解るぞ……っ」

最終的に同情された。

なんだこの人たち、ノリが変だよ。変な所でノッてくるよこの人たち、見ず知らずの人たちなのに。無駄にフレンドリーだな、オイ。何故か皆でオレを褒めだす。えらいなぁ、とか言いながらオレの肩を叩いて来た人、見れば顔に深い傷跡のある実に恐ろしい外見の人だった。どこを見回しても怖い人しかいない。ただ今怖い人に囲まれております、非常に肩身狭いです。

視線のやり所に困り、隣に座っているシロ君を見ると、ジュゴーと下品な音を立ててきのみジュースとやらを飲み干していた。音がしなくなるとストローを引き抜き、コップを傾けて中に入っていた氷をバリバリと食べる。口の中の氷がすべて無くなると、シロ君は笑顔でオレの方を向いて、何の脈絡もなく告げた。

「んじゃあ、タイマンドッチやろ！」

なんでそう言う展開になりました？

5（後書き）

西京焼きがうまかった。

6

【試合開始】

屋外。酒場の前、道のド真ん中。何でこんな事になったのか、そんな事オレには解らない。つーか知らん。地面には適当に書かれた長方形のコート、四角は二つ、隣接するように書かれている。

西側、とてもうれしそうな笑顔の少年、シロ君。

東側、茫然とした顔で立ち尽くすオレ、クーガ。

コートの中にはこの二人しかいない。一対一のドッチボール、タイマンドッチと言うらしい。なんと物騒な響きだろう、ほんと感動して泣けてくるよ。

コートの中の人口密度と比べ、コートの外は人でいっぱいだ。おそらく応援か野次馬か何かだろう。一つ気になるのが、結界でもあるかのようにコートから半径１０ｍ以内には誰もいない事だ、誰も近寄ってこない。その事が示しているのは、このタイマンドッチとやらは周りにも害が及ぶ物であるという事だ。と言う事はつまりやってる本人達はもっと危ないんじゃないんだろうか？

「殺っちまえー、シロー！」

ギャラリーの応援がさっきからこんなのばっかりだ、やるのやの字が変換されている所、そこが気になって仕方ない。

シロ君がタイマンドッチの説明を始めた。

「これからタイマンドッチの説明を始めます！　ルールは簡単、適当にコートを引いてその中で選手たちが向き合う。そして互いにボールをぶつけ合うだけ。先に倒れた方が負け！」

「何だよそれ……つまりキャッチボールの凶悪版みたいなやつか？」

「凶悪って何さ！」

凶悪と言ったら怒られた。だって想像してみろ、一対一のドッチボールを。どちらかが倒れるまで続行されるドッチボールを。そん

なのドッチじゃねぇ、恐ろしい。
　ところで、今更なんだが。なんでこんな試合をする事になったんだ？　特に理由は思い当たらないんだが……ここに来たやつは皆やるのか、タイマンドッチ、そんな規則は嫌だぞ。訳は解らないけれど、あの満面の無邪気な笑みで「ドッチボールやろう」と言われたら普通断れないだろう、断ったらきっと捨てられた子犬みたいな顔するだろうから、良心が許してくれない。
（あぁもう勘弁してくれよ、こんな急展開にお兄さんはついて行けませんからね。何かしらの説明が欲しかったりするんですよ、でもきっと絶対に説明はないんだろうね！）
　混乱しすぎて口調が変わっちゃったりするんだよ。まぁ何を言おうとすべて今更だ。こんな状況で試合放棄はできないだろう。多分逃げたらギャラリーに捕まる。人間あきらめが肝心、あの神と付き合っていれば否応なしに学ぶことだ。よし、腹を括ろう。
　そして、試合が始まった。

【シロ君のターン】
　凶悪と言われた事をもう忘れたかのように、シロ君はすぐに機嫌を直し、茶色いゴム製のボールを手にとった。ボールの固さを確かめるようにボールを数回たたいた後、シロ君はボールを右手に持って構えた。どこからどう見ても野球の投げ方だ。
「いっくよー、時速１８０Ｋｍ　！」
（ははは、車のスピードじゃねぇんだから……）

ビュッ、ガッシャァァン

　顔のすぐ横を、風が通り抜けた。オレの動態視力では到底追えないスピード、音が聞こえたのはその後だ。最初の音は耳元で聞こえ、後の音は背後から聞こえた。混乱しすぎてどんな表情をしたらいいのか解らない。

無表情のまま、十秒ぐらい間をとってから振り返ると、そこにはちょうどボールと同じ大きさの丸い穴の空いた木製のドアがあった、穴の空いたドアが風に揺れている、ボールの姿は見えない。シロ君に向き直り、オレは叫んだ。

「殺す気かーッ！」

「あ、外しちゃった」

えへっ、とか言って頭を小突いているシロ君。仕草としてはかわいい部類に入るんだろうが、アレを見た後では薄ら寒いものにしか見えない。測定は出来ないが、さっきのボールって本当に時速１８０ｋｍあるんじゃないだろうか。質量が軽いとはいえ、そんなスピードで物がぶつかって来たら……骨折どころじゃ済まない気がする、きっと胴体を貫通する。

背筋に冷汗を流しているオレに、誰かが拾ってきてくれたらしいボールが投げ渡された。投げ渡した人に『助けてくれ』と視線で訴えたが、その人はいい笑顔で親指を立てただけだった。

あのボールを直接食らったら負けることは必須……命さえ危ないかもしれない、キャッチすることも避けた方がいいだろう。だとしたらかわし続けるのが得策か。でもかわせないよな、ろくに見えないんだから。シロ君が外してくれたから助かったようなもんだ、次は外してくれるかどうか解らない。

つまり、この一球で勝たないと死ぬ確率がかなり高い！

6（後書き）

すみません、出し遅れました。
言い訳としては、ここ最近忙しかったのです。
何かと造っていたのです。

7

【クーガのターン】

オレが持っているこの茶色のボール、これにオレの命がかかっている。何とも情けない話だが、過言ではないだろう。

シロ君が投げ終わったから、次はオレのターンと言う事らしい。もう一度シロ君のターンがきたらオレは死ぬかもしれない、あのボールをまともに食らったら……命の危機だ！

シロ君がやったように、オレはボールを数回叩いてみた。ボールは全然凹まず、鉄球のような固さを持っていた、叩いた手が痛い。どれだけ空気を詰め込んだらこうなるんだろう。こんなボール投げ合ってたら危ないだろう、オレが投げても危ないと思う。

しかし、全力で投げよう。オレが投げたってせいぜいアザが出来るぐらいだろうし、オレの命の方が大切だ。ボールを握りしめ、オレはシロ君に向き直った。シロ君は天使のような笑顔を浮かべている。しかし、今のオレにはそれが悪魔の笑みにしか見えない。

ボールを当てるとすれば……どこに当てるか、それが大切だ。首から上はセーフと言うのが常識なので却下だ。当てやすい場所といえば腹だが、取りやすいのも腹だ、それに腹にボールが当たったって倒れはしないだろう、と言うわけで腹も却下。だったら足か、足にボールを当てて転ばせる、しかし足は素早く動かせるのでかわされやすい。あー……どこ狙えばいいんだよ？

「早く投げてよー」

シロ君が急かしてきた、確かにオレはさっきからずっとボール握りしめたままつっ立ってるんだよな、五秒ルールがあればボールを取られてる所だ。

“殺ーらっれろ、殺ーらっれろ、殺ーらっれろ”

とても楽しそうな声、久々に喋りだしたと思えば……やられろコールかよ、しかも『やる』の『や』の字が『殺』になってる。少し

ぐらい応援してくれたっていいじゃないか……少し悲しくなってきた。
“クーガ、私は信じてるぞ。お前が華々しく散る事を！”
やっぱりそう言う事しか言わないんだな、なんかだいぶ悲しくなってきた。もういいよ、直球で投げてやるよ。あれこれ考えるのはやめた、素直にまっすぐ投げる。
“逝け、クーガ！”
かなり悲しくなってきた、それこそ泣きたいぐらい。泣いていいかな？
“やだ”
やだとか言うなよ、ほんと泣きたい……いい加減にシカトを決め込み、オレはボールを構えた。オレは球技は苦手と言う訳ではないが、得意じゃない。死ぬ気で投げたところでたいしたスピードは出ないだろう。けれど、やるしかない。覚悟を決めよう。
相変わらずニコニコしているシロ君。オレはこの一球に全身全霊をかける！
自分でもかっこ悪いと思う掛け声とともに、オレはボールを投げた。
「でっりゃぁ！」
ボールは思いのほか勢いよく飛んで行った。ボールはシロ君の胸のあたりに向かって飛んでいった。オレは心の中で祈った。
（当たれ、と言うより当たってくれ！）
勝利の女神は、愛想笑いもくれなかった。
シロ君は片手をボールに向かって突き出した、ボールはその手に激突し、回転していたボールは手のうえで数回まわった。そのままシロ君がボールを鷲掴みにすると、ボールは回転を止めシロ君の手の中に収まった。
つまり、オレの全力投球は、片手でいともたやすく受け止められた。
自分の顔が引きつるのが解った。

【シロ君のターン】
勝負はあっさりついた。
「いっくよー」
実に力の抜けた動きと気の抜ける声とともに、剛速球が投げられた。全力投球をした後でバランスの悪い姿勢をしていたオレに、それをかわす事なんて到底無理で、オレは飛んでくるボールを見ている事しかできなかった。走馬灯なんてものは見ているヒマが無い。
シロ君の投げたボールは、オレの腹にぶち当たり、酷く重いそれが腹に当たる感覚を感じながら、オレは後ろに倒れた。
意識はどこか遠くへ行った。

7（後書き）

フリーソフトが重すぎて使えなかった。

8

【試合終了、シロ君の勝利】

「……ガッハァ、げほっげほっ、あー、あ～……生きてる？」

「イェーイ、オレの勝ちー！」

息を吹き返すと、楽しそうな声が聞こえてきた。首を持ち上げて声のした方を見ると、シロ君が踊っていた、勝利の踊りだろうか。自分の腹に触ってみると、ちゃんと腹があった。穴は空いてないし服も破れてない。それどころか、特に痛くもなかった。

「どうなってんだ……？　普通に死んだと思ったのに」

“ギャハハハハハハ、あっはっはっはっはっは、ひーぁ死ぬ、笑い死ぬ！　あはははははは、ク、クーガって……おバカ、おばぁか！　あはっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃはははは！　けひゃひゃひゃひゃひゃっ”

何の脈絡もなく神が笑い死にそうになっていた、いっそそのまま死ねばいい。

“なんだよ酷いな”

（酷いじゃねぇよ、何でそんなに笑うんだよ、訳も解らずに笑い死ねるほどの笑い種にされるのはむかつくんだよ）

オレがそう言うと、神はまたアホみたいに笑い出した。何でそんなに笑うのかが解らない、オレの負け方がそんなにおかしかったのか？　何とか笑いを抑えたらしい神はいつものように遠回しに質問してくるのではなく、答えをあっさり言った。

“あの世で死ぬ訳ねぇだろ！　ぶぁーか！”

……あぁ、そう言うオチ。

なるほど、神が笑うわけだ。むしろ今まで笑わなかった方が偉いのかもしれない、笑い過ぎだけど。つまりあれだ、オレは死ぬ訳もないのに「死ぬ！」って思い込んで必至になってた訳か。確かに笑

える話だな、他人事だったならば！
「穴があったら入りてぇ……」
あー恥ずかし、オレ思いっきりアホじゃねぇか。そう思った矢先、オレの目の前に手が差し出された、シロ君の手だ。その手を掴むと、シロ君はオレを立たせて。にっこりと笑いながら言った。
「楽しかったよ、ありがとう！」
「え……あ、ああ、うん」
全く邪気の感じられない笑みに困り、いまいち歯切れの悪い返事をしてしまった。先ほどのボールの投げ合いの何が楽しかったのか、釈然としない。しかしシロ君はそんな事気にも留めず、オレの手をぐいぐい引っ張っり酒場へと引きずりながら言った。
「運動したからきのみジュース飲もう！」
「またきのみジュース飲むのかよ！」

8（後書き）

いつもとだいぶ違うになりました、すみません。

9

「えっへッへ～、きのみは完全食品～♪」

酒場につくなりシロ君は「きのみジュース二杯！」と叫び、オレをカウンター席へと座らせた。案の定オレとシロ君の前にきのみジュースが出され、シロ君はとても機嫌良さげにそれを飲んでいた。オレも試しに飲んでみたが、やっぱりミックスジュース以外の何物でもなかった。味はちゃんとおいしい、フルーツ満点と言った感じの味だ。

シロ君はずっと怪しい歌を歌っている、木の実がどうのこうのと言う歌だ、どんだけ木の実好きなんだよ。歌の間に挟むように、シロ君は何の脈絡もなく言った。

「それにしても久しぶりだったなぁ、タイマンドッチ。マスターでも相手してくれ無いんだもんな」

「やるの久しぶりだったのか？」

何気なく聞いてみると、シロ君はこっちを向いて酷く悲しそうに言った。

「そうなんだよ、なんか屋外遊びだと誰も相手してくれなくなってさ、屋内遊びならやってくれるんだけど。クーガなら屋外遊びもやってくれると思って、無理に誘っちゃった。ごめん」

「あー、うん」

なるほど、ここにいる人間はシロ君と外遊びをすると危険だって解りきってるんだな。この言葉から解るのは、シロ君のあの物騒な投球と言うか攻撃と言うか、あれは全ての運動に当てはまるらしい。つまり、シロ君の運動神経は化け物並みと言う事だ、人間技じゃない。

シロ君は本当に人間なんだろうか？　あの世には邪竜だっていたんだから人間じゃなくてもおかしくない。好奇心にかられたオレは、何気なく聞いてみた。

「そういやさ、シロ君って生きてる時どんなふうだったんだ？名前忘れたらしいけど、なんか覚えてないのか？」
オレがそう言うと、シロ君は目をパチクリさせた。唸りながら頭を抱え、きのみジュースを飲み干すという、いまいち良く解らない行動をとったあと、シロ君は話しだした。
「オレさ、自分がどんな人間だったとか何やってたのか、そう言う事は覚えてないんだよ。仲良かった人とかは思い出せるんだけど、もう名前は思い出せないし。どんなとこに居たのかもいまいち思い出せない。ぼんやりとは思い出せるんだけどさぁ。ただね、オレが何で死んだかはちゃんと覚えてるんだ」
内容とは裏腹に、シロ君の口調は明るい。まるで楽しい思い出を語るかのように。シロ君は突然よく解らない言語で話しだした。
My god was said to me.
「Doll that brokens because it has had mind. Your role won't exist any longer. Your role is remainder one. The thing to break yourself is your role.」
Then, my answer is one.
”Yes, my god”
シロ君の言ったことがさっぱり解らなかったので首を傾げていると、シロ君は苦笑いで続けた。
「この言葉じゃわかんなかったかな……？　簡単に言うとね、オレさ、オレの神様にいらないから壊れろって言われたんだ
シロ君は笑っていた、とてもいい笑顔で、恐ろしいほど無邪気な笑顔で。
「神って……」
神と言われて思いつく人物は一人しかいない。酒場の喧騒がひどく遠く聞こえる。シロ君は自分の神だといった、ならばオレにはた迷惑をかけている神とは違う神なんだろう、オレとは関係のない神

だ。オレの知らない、シロ君の神様。
「要らないから壊れろって……つまり」
「だからここにいるんだよ」
どんな神かは知らないが、オレが口を挟むことではない。なのに、何でこんなに怒りが沸いてくるのか解らない、何に対して怒っているのかもよく解らない、けれどオレは確かに怒っていた、怒りのままに叫んでいた。
「神に言われたからって……要らない奴なんている訳ないだろ、誰だって生きる権利はあるだろ？　みんな必要とされて生きてるんだろ！？」
「違うよ」
オレの叫びをさえぎったのは、シロ君だった。先ほどのように楽しげな口調ではない、怒っている訳でもない、悲しんでいる訳でもない、落ち着いた声だった。顔を見れば、優しげな笑顔を浮かべているのに、声からは何の感情も読み取る事の出来ない。
「不必要なモノは、確かにある。だから終わるんだ」
オレには、その言葉の意味が解らなかった。『必要とされてない人なんていないんですよ』そう教えられてきたオレは、そんな事考えもしない。そんなの当然だ、そんな事考えたくもない。それなのに、なんて恐ろしい事を平然と言うんだ、シロ君は。よほど間違った教育を受けてきたのか、あるいは性根が腐っているのか。あるいは、実際体験したから解るとでも言うのか。
シロ君がオレを見ていた。左右で色の違う、赤い瞳孔の不気味な目。どこまでもまっすぐで迷いの無い、綺麗な目、血のように赤い片目。オレはその目を見て要られなかった。オレは苦し紛れに、自分でも尋ねた訳がよく解らない、くだらない質問をした。
「……お前は、恨んでいないのか？」
シロ君はきょとんとした顔をして、不思議そうに尋ねかえしてきた。
「誰を？」

「誰って……」
言葉が続かないオレに、シロ君はにっこりと笑って見せながら口を開いた。
「誰も恨んでないよ。オレは世界が、みんなが大好きだから」
多分、その言葉は心からの言葉なんだろう。本当に嬉しそうに、いっそ誇らしげと言ってもいいような顔で言うんだ、とても幸せそうに。オレはその笑顔を見て、邪竜の事を思い出していた。顔が似ていたのだ、顔の造りなんてカケラも似てないのに、邪竜とシロ君は同じ顔をしている、同じ表情をしているのだ。
（どうしてそんな顔ができるんだよ……！？）
オレはそこまで割り切れない、頭では解るが、心が理解できないのだ。
そんな事を心の中で叫んでいたから、背後から迫る気配に気づけなかったのだろう。

9（後書き）

腹の調子が、やけに悪いです。
体操服を、便利クーポンと聞き間違えました、何があったのでしょう。

10

「どうした悩める青少年、泣きそうな顔して！」

……吃驚した。

背後から突然声がした、同時に背中を思いっきり突き飛ばされる。あわてて振り返ると、そこには姉さんが立っていた。ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべている。気配を消して背後に近づいた上でいきなり叫ばないでほしい、寿命が縮む。人がものすごくシリアスな気分になっていたと言うのに……

「さっきからシロ君の相手しててて疲れたろ、二階で休むといいよ」

「あっ、オレも寝る！」

なんだよこの二人……オレはシリアスから一瞬にしてギャグに方向転換できるほど臨機応変じゃないっつーの。

「ほらほらこっち、階段登った先だよ」

シロ君に引きずられるまま二階に行くと、そこは部屋がいくつかあり、確かに宿屋らしき風体だった。なんかもうお泊まりの雰囲気。ぼろいベッドが二つ置いてあるだけの部屋。

「オレこっちーっ！」

部屋に入るなり、シロ君は向かって右側のベッドにダイビングした。シロ君は盛大に跳ね、ベッドのスプリングが危険な音を立てる。

「おいおい……」

「クーガはそっち！」

いきなり呼び捨て……まあいいけど。オレが反対側のベッドに座ったのを見ると、シロ君は履いていたブーツを脱ぎ散らかし、着替えもせずに布団に潜った。ちゃんとパジャマに着替えろよ、パジャマ持ってないのかよ。そんな状態で、シロ君は言った。

「じゃ、おやすみ！」

「もう寝るのかよ！？」

「あ、そうだ。まだクーガに用事があるんだった！」
「今度はなんだ！？」
布団から跳ね起きたシロ君は、急に改まった様子になり。ベッドの上で正座をしながら言った。
「ある人に届けてほしいモノがあるんだ」
突然の頼み事にオレは訳が解らず、首を傾げた。
「クーガは生き返るんでしょ？」
「まぁそうなる……はずだけれど」
「オレはさ、まだ生きているはずのあいつに、届けたいモノがあるんだ」
やけに真剣なその眼差しだ、正面から見たらたじろぐぐらいに。
「あー……別に届けてやってもいいけどよ、『あいつ』って誰なんだよ？」
軽く視線を逸らしながらオレが尋ねると、シロ君はボソリと言った。
「……もう、名前も思い出せない」
「はぁ！？」
名前忘れたのかよ！？　と突っ込もうと思ってシロ君に向き直ると、シロ君はうつむいて、拳を握りしめていた。言葉を無くしていると、シロ君は『あいつ』についての説明らしき物を語り始めた。
「生まれた時から図体でかくて、力も強かった。頭が足りなくて、いっつもぼけーってしてて、人の話全然聞いてないように見えるけど実は聞いてるんだよ。味覚とかいろいろ悪くてさ、料理はゲキマズ。守る対象以外はどうでもいいって考えでさ、自分の事なんか全然考えてない。敵にも容赦なくて相手ボコる時は本当にボコボコにして……ほんと強情で……」
「性格の説明されてもわかんねーよ、外見を説明してくれ」
その質問に、シロ君は目を泳がせながら順番に答えた。
「え～っと、髪は……赤、ド派手なトゲトゲ赤毛」
「トゲトゲ赤毛……？」

「目はオレと同じ色……いや正反対だっけ……？」
「おい……」
「身長は入り口で頭ぶつけるぐらい」
「ちょっと待て」
「水色作業服青長靴！」
「まともに答えろよ！」
人の話を聞かない人との会話、いつもの事、オレの言葉は届かない、もう慣れたよ、ははは……。オレがへこんでいると、シロ君はそれをオレに見せながら言った。
「その人物にこれを届けてほしい！」
それは、鮮やかな紅の宝石だった、動脈に流れる鮮血をそのまま凝縮したような色の宝石。カットなどは施されておらず、直径は５ｍｍ程度しかない小さなものだ。
シロ君はオレの左手をつかむと、勝手に手を広げさせて宝石を握らせた。そして自分はベッドに戻り、布団の中で敬礼をすると言う不信行動を行い、はきはきとした声で言った。
「大佐、あとは頼みました！」
「オレは大佐じゃない！」
オレがツッコミを返した時には、すでにシロ君は寝ていた。いくらなんでも早すぎる。
「おーい、シロくーん、マジ寝ですかー？　もしもーし！」
返事はない、ただの屍のよう……違った、死んでない、死んだように眠っているだけだ。どうしよう、一方的に頼まれ事を受けさせられてしまった、しかも成功率の低そうな。
左手を広げると、そこにはシロ君から押し付けられた赤い宝石が転がっている。光に透かしてみると、鮮やかな色の中にドス暗い光をはらんでいた、何となく禍々しい色だ。
「これどうしよう……」
宝石を手で弄んでいると、いままで珍しく黙っていた神が口を開いた。

“届けてやれば？　そのトゲトゲ赤毛水色作業服に”
「なんだその名称……」
突っ込みながらも、言えて妙だと思いつつ、オレはその宝石をポケットに突っ込んだ。ブーツを脱いでベッドの横に置き、布団に潜った。
“なんだ寝るのか、そして届けてやるのか？”
「まぁ一応……おやすみ」
ベッドに入ると一気に眠気が襲ってきて、さした時間も掛からずオレの意識は沈んでいった。
寝てしまう直前、神が『おやすみ』と言ったような気がした。

１０（後書き）

嗚呼……疼く、肩が疼く！

肩が妙に痒いのです、汗疹でしょうか？

シリアスな台詞は、用法用量を守って正しく使いましょう。

次の話が上げられるのは、相当後になります。

更新停止宣言です、更新再開予定は不明です。

次はデリバークーガ、お楽しみに！

1（前書き）

珍しく暇ができたので、久々に投稿します。一気に一話分。

1

オレの名前は久我　朱彦、クーガ・グリムゾンと呼んでくれ。
オレはとある世界で勇者をやっていた。
あの金色のピアスをつけた瞬間にオレの運命は決まった。神の声を聞くことの出来るオレは勇者となり、ウィクトリア姫を助けるため旅立ち、とうとう邪竜ファヴニルを倒した。いい加減にこの話飽きてきたぞ。
そのあと、オレは姫様に殺された。今更だな、ははは。ちなみに邪竜は弾みで殺した。

その後、死んだオレはあの世に来たんだよ。
そこには変なガキの閻魔様がいて、オレはまだ死んでいない事とか、心配停止状態だという事とか、色々教えられた。
そこでどう言う訳だか邪竜と会ってな……ほんと何でいるんだよあいつ、擬人化しやがるし。
それから邪竜と閻魔様と呑気にお茶を飲んで、話してたら閻魔様から天国か地獄か好きな方を選べと言われた、選べちゃうらしい。まぁ天国選ぶよな、人として。

そして天国、何処だここは。そんな言葉しか出ない場所だったよ、なんか治安悪そうな街で……茫然としてたら姉さんにつかまって、バーに連れていかれた。そこにシロ君がやってきてちょっと喋ったら、いきなり「タイマンドッチやろ！」って事でその怪しい事をする事に、一対一のドッチボールだぜ、物騒な。
それで……うん、あっさり負けました、強すぎるよシロ君。バーにもどってジュース飲んでからシロ君と話してたら、疲れただろうから休めと言われ、休むことにしたら、そこでシロ君がオレに頼み事を……ほぼ強制で頼んできた。名前も解らない人物に届け物だと

か、無理言ってんじゃねーよ。

いつも言ってる事だけど、オレは人とは違うところがある。
勇者だとかそう言うのは関係なしに、決定的に違うところがあるんだ。あのピアスをつけた瞬間に知った、いや勝手に教えられた。

オレは、
自分が小説の主人公だと知っている。

2

「知っているからと言ってこの非常識さは認めねぇ……」
“クーガさん、話を重ねるたびにスタートでの元気が無くなっていっていませんかね？“
「話を重ねるたびにタイトルがださくなるのも気のせいじゃないよな？　デリバーって……タイトルがとうとう片仮名だけに、せめてオレの名前を漢字に直してほしい」
“そっちの方がダサイだろ。元気出せよ、ほらいい景色”
「その景色が問題だ、勘弁してくれ……適応能力が限界に達しそうだ」
オレは周りの景観がよく見える丘の上で座り込んでいる、吹き込む風は故郷に比べるとなんと言うか……かなり不味い空気で、少し肌寒い。視界の大半を支配する街らしき場所には、天を突くような高い塔が立ち並び、四角い乗り物が舗装された道路を驚くべき速さで走りぬける。きっと信じられないほどに人間がたくさん居るんだろう。
「家に帰りたい……」
“おうちはもうないよ？”
「嫌な事思い出させるな！　ああもう……本当に嫌だ」
これは小説これは小説、非常識な事はいくらでも起こりえるんですよ。なーんて自分に言い聞かせてみても、オレ自身自分が小説の主人公だなんて実感はあまりないのだから、どうしても異常にしか思えない。オレにしてみればこっちが現実だ。膝を抱えて座り込んでいる姿は、見方によっては鬱病患者にも見えるだろう。実際鬱になりかけてる。
本当に色々と嫌だ、この非常識さとか、神の存在とか、オレの頭の中で起きてしまった事とかが！
“さりげなく人の存在否定すんな。ほら落ち着け、はい深呼吸。

都心の空気はうまいぞ”
「東京の空気がうまい訳ないだろう、軽井沢じゃないんだから！」
“ふはははは、名古屋の方が空気悪いね！”
「そんな嫌な事で張り合うなよ……それに関してさっきから気になって仕方ないんだがな、何故オレが東京とか軽井沢とかを知っているんだ！？　オレはエウロペ　黒の国　帝都ニルヘイム　１０番街青池町２丁目４番地で生まれ育った異世界の住人だ！」
“もう一声”
「エウロペ　黒の国　帝都ニルヘイム　１０番街青池町２丁目４番地！」
“聞けば聞くほど珍妙な住所だなオイ……”
そう、オレはこの世界とは別の世界で生まれ育った人間だ。ちなみに神の突っ込みは無視する。東京に来たことも、それどころか地球に来たのも初めてである、オレが生まれた星の名前はエウロペだ。そしてこの星の名前は地球、それなのにもかかわらず、何故オレはあの高い塔の名前がビルだと解るんだろう。道を走る乗り物は車で、あれはホンダであっちはトヨタだとか、ついでに知らない内に着替えさせられていた服が、すべてユニクロだったりする事まで解るのか。
“５００円でこの袋に詰め放題！　みたいなセールで売ってた物よりはいいと思え。全身ユニクロは割と贅沢なんだぞ”
怒っている事を示しているのか、セリフを言った後にプップップー、などと謎の擬音を付け加えた。ウザさを極めようとしているんだろうか？
「そんなことはもういいから、オレの頭の中に詰まってる、この地球知識は何なのかを説明しろ！　具体的に、どうやって詰めたのか、どこかの引用なのかって所を！」
“最後まで聞かなきゃダメだぞ★”
「何かにつけて星つけんな、耳栓しても聞こえてくる声をどう聞かないようにしろと……」

昔の努力を少し思い出しながら言ったオレのセリフはスルーされて、神は話を続けた。
“神ちゃんのミラクル講座。クーガに地球知識をどうやって詰めたのかと言う議題について説明いたします、説明がややこしいので説明いたしません”
「説明するって言っておきながら説明してねぇじゃねぇか」
“え～、続いてぇは、クーガの頭の中に入っている知識ですが、ある程度の一般常識（オタｖｅｒ．）ですよ”
「無視かよ、あと余計なカッコを消してくれ」
“安心しろ、オタ知識を持っていたとしてもその人がオタクだとは限らない。漫画とか読みながらハアハアしてる奴は間違いなくオタだけど、マンガ読みながら物理法則とか生物学とか画像処理能力などについて考えてる奴は、実際オタなのかただの変人なのかどっちだと思う！？”
「あーうるさいうるさい、いい加減に黙れ。オレはオタクの知り合いがお前しかいないから比較し辛いけどよ、お前みたいな奴って時点で変人だ！」
つっこむ対象が物体として存在しないため、空中にツッコミを入れた。空気に裏拳が炸裂する、何とも言えない虚しさが身を包んだ。そんな無駄な漫才に気をとられ、オレは背後の気配に気を払う事を忘れていた。

3

「そこで何をしているんですか！？」
いきなりだった、背後から突然声が聞こえてきたのだ。
あわてて声のした方に振り返ると、そこには紺色の制服を着込んだ警備員がいた。そう言えば足音が聞こえていたなぁと思いながら、いまだに喋っている神を黙殺して、きちんと警備員に向き直ると、警備員は言った。
「ここは皇櫻学園の敷地内ですよ、関係者以外立ち入り禁止です。道に迷ったのでしたら受付までご案内しますが？」
ここは学校の敷地内だったのか！？　目を白黒させながらも、改めて警備員の背後を見ると、確かに大きな建物があった、気づかなかった……。
“ばーかばーか”
やかましい。地図も何も持っていない訳だし、とりあえず地図の手に入りそうな受付につれて行ってもらえるのは好都合かもしれない。そう考えていたら、神がことさら大きい声で言った。
“オレは不法侵入者だ、そして変質者！”
「オレは不法侵入者だ！？」
何いきなり叫んでるんだこの馬鹿は！
“バカ言うな！”
馬鹿だろう、なんでそんな脈絡のないセリフをいきなり叫んでいるんだ。まったくやかましい奴だな、いつか静かになる日が来るのか？　せめて音声だけでよかった、視線とかを感じるようだったらもう気になって眠れやしないだろう。先ほどから視線を感じる、そうこんな感じに。
……視線？
「あの……とりあえず一緒に来ていただけますか？」
警備員さんは警備員らしく、警戒心で満ちた視線で、こちらを見

ていた。
　しまった、神があまりにアホすぎる発言をするものだから、つられて叫んでしまった。他人が聞いていたらオレはいきなり不審者宣言をした立派な不審者だろう、見た目が不審でなくてもすでに不審者だ。ヤバイ、非常にヤバイ。
「あ……えっと、今のは何と言うか、うっかりと言うか、その」
“……まさか成功するとはな”
（ゴラアアアァァァ、まさか狙ってやがったのかあああぁぁ！！）
“ヤダなぁ、そんなに怒らないでよ”
　否定しなかったなこの野郎、しかもなんだその少し照れたような言動は。つられる方もアレなんだろうが、やっぱりこいつだ、こいつが悪い。どうしよう、非常に殴りたくなってきた。どう足掻いても殴れない事が口惜しい。
「話を聞かせていただきます」
　そうこうしている間に警備員さんはオレの手を掴み、何処かに連れていこうとする。このままだと警察を呼ばれかねない、何せ詳しい事情を話せと言われても話しようがないからな、まともに話したら黄色の救急車呼ばれてしまう。何にせよ、ヤバそうな展開だ。
（これが小説の出来事だって言うなら、こう言うときに都合よく助けてくれる人が来たりしないのかよ！）
　心の中でそう叫んでいた時。背後、つまり先ほどまでオレが居た付近から声が聞こえた。
「どうも今日は警備の人」
　やけに明るい調子のテノール、声優か何かと思えるような美声だ。振り返りその声の持ち主を確認した警備員さんは、驚いた様子でその人の名前を呼んだ。
「……樒実さん？」
「あれ、あなたとは初対面のはずですけど？　初対面なのに名前知っててもらえるなんて光栄ですねぇ」
　本当に来たよ、助けてくれそうな人！　その人は人なつっこそう

な笑みを浮かべ、黒いスーツをかっこよく着て、オレが先ほどまで座り込んでいた場所に立っていた。メガネがよく似合う。いつのまに現れたんだろうこの人、足音も気配もなかったが。

「いやぁごめんなさいね。この人オレの友達なんだけど、地図持ってないとすぐ迷子になっちゃってさぁ、ついでによく変なこと言ってるけれど気にしないであげて」

酷いこと言うなこの人、と思いながらもには出さないでおいた。オレはこの人の友達でもないし妄言癖もない、と心の中で否定しておこう。迷子になりやすいのは否定できないが。

「ほら行くよ、太郎君。第二情報処理教室で集合って言ったじゃないか」

取って付けたような名前だなぁ。その人がオレの腕を掴んでどこかへ連れて行こうとするのを、警備員の人は止めなかった、困ったような顔をしてみているだけで、声すらかけてこない。オレも抵抗しなかったため何の障害もなく、半ば引きずられるように連れていかれた。

4

「君ってリアルに迷子癖だったんだねぇ」
「はぁ……」
「どっかで読んだ話の迷子はすごかったよ。一族代々道に迷いやすくてさ、エーデルワイスを取りに行ったはずなのに、気づいたら大陸一週旅行を徒歩で果たしていたという位の迷子だ。一週間で大陸一周だよ、疲れそうだよねぇ」
「そうですね……」
「オレもこの間ね、家の中で弟たちとかくれんぼしてたんだけどさぁ、桃李がタンスの中に隠れてて、自力で出れなくなってたりしたんだよ。太郎君もなんか敵に食われてた時あったねぇ」
「はぁ……」
よく喋る人だなこの人、適当な相槌打ってるだけなのにずっと喋り続けてる。どこかへ向かっているのか、オレの腕を掴んだままマイペースに道を突き進んでいくので、仕方なくついて行く。悔しいがこの人はオレよりコンパスが長いので、ついて行くのが大変だ。……それにしても、この人誰だ？　そして話にたびたび出てくる太郎君とは誰の事だ、どう聞いてもオレに向かって言っているようにしか聞こえない。
「太郎君も風の結晶探してダンジョン練り歩いてさぁ、奥に行きすぎて帰れなくなって、結局オレにメールしてきた事あったよねぇ」
「いや、オレは太郎じゃなくてクーガですけど、クーガ・グリムゾン」
「クーガ？　それが太郎君の本名かい？」
「いや、本名は久我　朱彦……って、それ以前にオレは太郎君じゃありません！」
やっと否定できた。その人は足を止めて振り返り、小首を傾げながら尋ねてきた。

「え、つまり君は藤原　太郎君ではないと？」
「久我　朱彦です」
「あっちゃあ、オレってば人違い。オフ会で相手間違えたのは初めてだよ。そう言えば太郎君、白衣着てくるって言ってたなぁ。ごめんね久我君、だいぶ引きずってきちゃったよ」
いやぁ悪かった、と言ってやっと腕を放してくれた。気づけば周囲はすでに建物の中。ここはどこだ、と思っていたら、勝手に解説が入った。
「ここは皇櫻学園大学部のC棟だよ、パソコンがいっぱいある棟。分かってないって事はきみ、新入生かい？」
「違います」
なぜこちらが何も言っていないのに解説をくれるんだ、と思いつつ否定する。何かこの人危険な香りがする、物理的にではなく人間として。
「じゃあ大学部を覗きに来た高等部の生徒？」
「それも違います、なんと言うか……その……迷子です！」
“ブッ……いい年した男が、大声で迷子ですと叫ぶとは！”
（しょうがないだろ、迷子なんだから！）
ちくしょう、穴があったら潜りたくなってきた。オレだって好きでこんな事してるわけじゃない。
「OH、迷子。実生ちゃんってば、迷子って自己申告してきた胡豆より年上の人に会うのは初めてだよ！」
「迷子で悪いか！」
「いや、大歓迎」
「大歓迎！？」
何やら目を輝かせてる、なんかこの人ツッコミ所がありすぎるぞ、間違いなく変人だな、親切なのには違いないのだろうけど、やっぱり危なそうだ。なんか生き生きした顔をしながら、口を開いた。
「自己紹介がまだったね、オレの名前は樒実　実生、ミバエなーんて女の子みたいな名前だけど、れっきとした男の子だぞ☆」

あれ、なんかこの人が神に見えてきた……。
“私はメガネじゃない”
（いや、星を飛ばすところがな……）
オレが少なからず引いているのを気にも止めず、榕実さんとやらはオレの手をがしっ、と掴んだ。オレがますます引いているのにもかかわらず、榕実さんはより強く目を輝かせ、力強く言った。
「迷子になったというならオレに任せておけ。ミノ○スキー粒子の中だろうが、A．T．フ○ールドの向こうだろうが、ちゃんと送り届けてやるからな！」
「そんなところ行きたくありませんから！」
何でこの人こんなにノリノリなんだよ。そして伏せ字の下がわかる自分が嫌だ。これが神の言ってた『ある程度の一般常識（オタｖｅｒ．）』ってやつか、なんか世代間違ってるだろ！
「で、君のお家はどこなんだい？」
いきなり普通の話に戻ったので、頭の中で続いていたツッコミを慌てて留める。質問に答えようと思ったのだが、どう説明したらいいか、検討もつかない。
「ひょっとして家出？」
「家出ではないんですけど、えーっと……」
なんと説明したらいいか、それ以前に説明して良い事なのか、そしてオレはどこに行こうとしているのか。わからなくなって、何も言えなくなった。これじゃあ迷子と言うより、放浪者だ。

5

オレは何をしようとしていたんだっけ？
“……ポケットの中には何があるでしょう”
ポケットの中？　なんの事だと思いつつ、ポケットの中を漁ってみる。すると、小石のような物が入っていたので、取り出してみた。それは、真っ赤な宝石だった。これなんだっけ？
“フ……ッ、クーガのド忘れ、すいぶんと極まってきたな。一番最初に自分で説明してたくせに”
あのだいぶ大雑把になってきた前回説明の事か、あれに乗るような事と言ったらだいぶ重要事項のはずだが。オレ前回何してたっけ、あの世でシロ君と……。シロ君、これをオレに渡した、そして……
「……そう言えば、これ届けなきゃいけないんだった！」
“ハイ思い出せた、頑張れデリバークーガ”
（なるほど、カタカナばかりのタイトルはそう言う意味だったのか。と言う事は、今回はこれを届けに行く話って事か）
“イエス、サー”
「それを届けに行くのかい？」
「は、はいそうです！」
樒実さんの存在を忘れていたから、声を掛けられた事にびっくりしたので、若干挙動不信になったが、気にしないでいてくれたらしい。
「届けに行こうとして迷子になった、って訳か。で、誰に届けるんだい？」
「え……えっと」
困った、困ったぞ。話の流れとして、それを尋ねるのは当然と言える。けれど、そこ聞かないで欲しかったかもしれない。その届ける相手、よく解らないんだよ。シロ君の説明が酷過ぎた、なんと説明したらいいのか、検討もつかない。

「えー……っと」
どうしようか、何をどう説明しようか。樒実さんの視線が痛い、そんなに見ないでくれ。と言うか、樒実さんに説明してもな、多分知らないよな。だからそんなに見ないでくれ、猫みたいな目してるから余計気になるんだよ。沈黙に耐えられなくなったオレは、シロ君の説明をほとんどそのまま述べる事にした。
「髪はド派手なトゲトゲ赤毛、目は金だか赤だか……ヘテロクロミアなのか？　身長は入り口で頭ぶつけるぐらいで、水色作業服青長靴」
やっぱりおかしいだろう、この説明は、口に出すのが恥ずかしい。なるほど、と樒実さんは言って、オレの説明に接ぎ足すように話しだした。
「それで頭に猫を乗せて、なにげに畑仕事関係が好きで、料理が生物兵器で、日課はひなたぼっこだったりする？」
「いや、そこまで知りませんけど。そう言えば料理はゲキマズだとか言ってたような……って、覚えがあるんですか！？」
あり得ないだろ、偶然であった人に、何気なく尋ねたらビンゴ。なんだこの驚きの展開は、ご都合主義ってやつか！　樒実さんは、さらに驚きの発言をした。
「家にいるけど」
「マジで！？」
そんな不審者が自宅にいるのかよ。いやまて、この人自体不審者と似たようなものだから、いてもおかしくないのか？　落ち着け自分、十分おかしいから。
「ラッディに用のある人なんて、初めて見たなぁ。それをラッディに届けるって事かい？」
「ラッディって言うんですかその人。多分そのラッディって人で合ってます」
偶然だろうが怪しかろうが、こんなはっきりとした手掛かりはないだろう。何が何でもそのラッディとやらにこれを届けなくては。

ところが、榕実さんは腕を組み、う～んと唸りながら首を傾げ、申し訳なさそうに言った。
「……うち、家族以外は余程信用のおける人しか、家に入れちゃいけないって決まりがあるんだよなぁ」
そんな家の決まり事は初めて聞いたぞ。なんだその忍者の隠れ里にありそうな決まりは、この人一体何者なんだ？　さっきから気になる事がありすぎて、頭が疲れてきた。
「オレが今からパパーッと家に帰って届けるって手もあるけど、今の時間に家に帰るとお父様に怒られてしまう」
「お、お父様……？」
ああもう、この人に突っ込むのが疲れてきた。細かい事は気にしない方がいいんだよな、でもこれって細かい事で済ませていいのかな。段々脱力してきたよ。でも何とかしてこれを届けなくては、オレの存在意義が危うくなる……気がする。
榕実さんは体が傾いてくるぐらい首を傾げていたのだが、何か閃いたらしく、一気に体を起こして手を叩いた。
「そうだ、榴火に頼もう！」
榴火って誰だよ、と思いつつ、黙っている方が話が早く進みそうなので、黙っている事にした。
「ああでも、ひょっとしたら榴火は学校に居ないかもしれない。桃李は部活があるな。じゃあ胡豆か、小栗でもいいか」
その木の実にしか聞こえてこない名前は誰のものだよ？　そう思いつつ黙っていた。榕実さんはメモ帳を取り出し、それに何か書き、破ってオレに渡してきた。そのメモには、こう書かれていた。
『榕実（しきみ）　榴火（りゅうか）　皇櫻学園高等部普通科３年Ｂ組
桃李（とうり）　皇櫻学園中等部１年Ｃ組
胡豆（ごとう）　皇櫻学園小等部４年Ｄ組
小栗（ささぐり）　皇櫻学園初等部３年Ｅ組』
フリガナがふってなかったら読めなさそう名前ばっかだな、なんかＢＣＤＥときれいに並んでるな。と言うかこれのどこがラッディ

とやらに繋がるんだ？
「オレの可愛い弟たちだ！」
そうですか、弟さんですか。どう言う話の流れで紹介されたのか、さっぱりわからないよ。
「とりあえず榴火のところに行ってみてくれ、いなかったら胡豆、胡豆がだめだったら小栗、小栗が不安だったら時間がかかるけど桃李を待っててくれ、オレの帰りよりは早いから」
はあ、そうですか、そうですか。……。
「……全員顔がわかりませんよ！」
「だいじょーぶ、みんな割と有名人だから」
「全然大丈夫じゃねぇ！」
だめだ、突っ込まないとだめだこの人。訳のわからない方向に行ってしまう！　つまるところ、オレを家に入れる訳に行かないから、この弟たちに代わりに届けてもらえ、と言うわけなんだよな。名前しか知らないのに、弟たちが探せるわけないだろう！
いろいろな意味を込めて「大丈夫じゃねぇ！」と突っ込んだのに、榕実さんは的外れな事を言い出した。
「そうだね、その格好で校内をうろつくのは危険かな。ここセキュリティ固いから、また警備員さんに捕まるといけないし」
ちくしょう話が通じねぇ！　と打ちひしがれているオレを放置し、榕実さんはちょっと待っててね、と言い残して茂みに隠れた。そして、数分もしないうちに榕実さんは戻ってきた。緑の制服を手に持って。
「はい、これ着てれば十中八九だいじょーぶ」
「……なんですかそれ？」
「高等部の制服だよ、久我君は大体それぐらいの年だろう？　日本人らしからぬ青っぽい目の色をしてるけど、黒と言えば黒だし、後はセーフだし、トイレとかで着替えてしまえば、大丈夫でしょう。あとこれ、地図ね」
有無を言わせず、榕実さんはオレにその制服と、地図と、そして

用意の良い事に、脱いだ服を入れろという事だろう、黒のエコバックを渡した。親指を立て、イイ笑顔で言った。

「制服は届け物と一緒に渡してくれればいいから、がんばれ☆」

オレは苦笑いで、親指を立てた。

6

「ははは……変な人だったな」
“おまえの方が変人だよ”
「そのセリフ、そのまま返してやる」
オレは茂みの中で着替えていた、地図を見ても近くにトイレが無かったのだ。あの後、樒実さんは、じゃあねー、と言って森に消えた。煙のような消え方だった、登場の仕方も唐突だったし、あの人は瞬間移動が出来るのではないかと疑ってしまう。あんな怪しい人を当てにして良いのだろうか。しかし、他に手段はない。
なので、こうして樒実さんの貸してくれた制服に着替えている。
「ぶかぶかだな……この制服、樒実さんのサイズで出来てるから、オレには大きすぎる」
“そうだね、胴回りとかはともかく、足とか足りないね”
「その言い方やめろ、オレが太いみたいじゃないか！」
“太いじゃん”
「樒実さんと比べればな、あの人細すぎるだろ！」
”確かにひょろ長いね”
などと話している内に着替え終わった、裾も袖も余っているが、誤魔化せ範囲ではない、脱いだ服はエコバックに押し込んだ。
ポケットから取り出しておいた小石を、改めて確認する。色は派手だがとても小さいので、下手するとなくしてしまいそうだ。シロ君は何でこれをラッディって奴に届けてほしいんだろう、手紙とかならともかく何故に宝石。そう思いつつ、ズボンのポケットに入れ直した。
「さてと、それじゃあ行くか」
“どいつから？”
「そうだな……言われた通りの順番に行くか？」
“捻りヌェー”

「捻りがいるのかよ」
“いらない”
なにはともあれ、地図を改めて開き、ルートを確認する。現在地は大学部のC棟、その裏に広がる森の中。大学部に用がある人はいないから、すぐに出ていいだろう。用があるのは高等部、次男の榴火とやらだ。幸い、高等部はここから近い、徒歩十分程度で着くだろう。
「じゃあ行くか」
エコバックを肩にかけていざ行こう。と言う時に、神がナレーション調で言った。
“果たしてクーガは無事に高等部に着けるのか”
「着けるだろう」
“きっと道に迷う”
「さすがにこの距離じゃ迷わないだろ……うん、たぶん」
“ほんとーにぃー？”
神が余計なこと言うから不安になってきたじゃないか。
「迷わないといったら迷わない、行くぞ！」
“れっつらご～”
オレの足がやけに速足だったのは、気のせいだったという事にしておこう。

7

「ちゃんと着いたぞ！」
“三十分かけてね”
神の突っ込みは聞かなかった事にして。高等部の棟に着いた、オレと同じか、数歳ぐらい年下であろう生徒が、校舎の中で楽しげに会話している。どうやら今は放課中らしい、好都合だ。
地図によると、三年生は一階に教室がある、そして次男のいるB組は、オレから見て右から二番目の教室。わざわざ建物内に入らなくても、窓から声をかければ大丈夫そうだ。ちょうど窓際で暇そうにしてる男子がいる、あいつに次男を呼んでもらおう。
「あー、ちょっと悪いんだけど」
声をかけると、そいつは眠そうな顔でこちらを向いた。
「んー、なんだよ。俺は今暇なんだよ、リューがいなくて暇過ぎるんだよ」
「暇なら聞けよ。榴火って奴を呼んでくれないか？」
「リューなら居ないって言っただろ。またどこぞの部活の応援に行ったんだよ、なんで平日に応援に行ってんだか」
「……お前がさっきからリューって呼んでるのは、榴火の事か？」
「そうだけど」
相変わらず眠そうな顔で答えを返す男子A（仮）。リューって……それはあだ名か、そのあだ名はいかがなものかと思うぞ。
そんな事より、問題は別にある。こいつの話によれば、今榴火はどこぞの部活の応援に行っていないらしい。それじゃあこの届け物を預けることができない。
「いつ戻ってくるんだ？」
「ふっ……、どうせ学校にはもう戻ってこないさ、直で家に帰るんだろうさ、俺をおいて」
どうやら戻ってこないらしい。それにしても、こいつさっきから

何か変だ。軽く暗雲を背負っている、そんなに榴火がいない事がショックなのか。
この鬱々しい男子を前にし、オレの感が早く離れた方がいいと告げている。危険人物には見慣れているので、こいつがどのくらい危険かどうかは良くわかる。おそらく実力は無いが、今は危険な状態、早急に離れるべきだ。
「あー、そっか。じゃあオレ行くわ」
「そうか、お前もリューを探しに行くんだな。そして勧誘だの応援だのと言ってリューを連れ回すんだな。お前もか、お前も俺のリューを連れていくのかこの野郎おぉぉぉっ！！」
予想通り危険人物であった鬱々しい男子は折れに掴み掛かろうとしてきたが、伊達に剣術を学んできた訳ではない、軽く躱し身を翻す。
「じゃあな、二度と会わないと思うぜ！」
『俺のリュー』宣言をするような色んな意味で危険人物からは早く離れるに限る。呼び止める声を後ろに、オレは走って逃げた。

8

（次は……三男飛ばして四男の胡豆だな、胡豆って……）
“孤島”
（オレもそう思ったんだよ、名前付けた奴の顔が見たい）
などと与太話をしながら校内を進んで行く。胡豆とやらは小等部にいるらしい、先程までいた高等部からは結構距離がある、とは言ってもせいぜい徒歩三十分も掛ければ間違いなく着くような距離だ。
……着くはずだった。
ぴんぽんぱーん、と神が口頭で効果音を言っているのが聞こえた。
“神ちゃんがー６０分経過をーお知らせします”
（うっせぇ、ここどこだよ？）
“高等部の体育館の裏”
（戻ってる！？）
“いいや、むしろ遠ざかった”
神の言葉に脱力し、オレは体育館にもたれ掛かり座り込んだ。改めて地図を開いてみると、確かに遠ざかっている。
（なぁ、神様よ）
“なんだいクーガ君”
（オレはひょっとして方向音痴なのか？）
“えっ……今更？”
（今更何だ、何なんだ、はっきり言え！）
答えはすでに出ている、神のその態度が何よりの証明だ。そしてそれが何より悲しい。別に答えが帰ってこなくとも良いと思っていたのだが、思いのほか律義に神は答えを返してきた。
“クーガ、旅してた頃の事は覚えてるか？”
（覚えてるよ）
“何回迷った？”
（……。ほら、慣れない土地って事もあるじゃないか、地図

無い時も多かったし）
“生まれ故郷でも迷ってたよな、現在進行形で地図持ってるし”
「……うがあああああ！」
“叫んでどうする”
珍しく冷静に突っ込んでくる神が憎い。確かに迷うな、よく迷ってるな、十八年の人生の中で何回迷ったか覚えていない位には。ははは、凹んできたよ。
“さて、彷徨える子羊を見てるのにも飽きたし。神ナビを起動してあげよう！”
（そのセリフ、何回か聞いた覚えがあるぞ）
“十回は起動した事あるからな”
オレはますます凹んでしまいましたとさ。
“ハイ、とりあえず右にまっすぐ”
スルーかよ、人に散々スルーするなって言っておきながら。ずいぶん脱力してしまったが、目的地へ向かわない訳にもいかない。オレは神の言う通りに、右へまっすぐ歩いて行った。

9

神の言う通りに歩いたら、すぐに小等部についた、予定通りの３０分で。オレの今までの努力は何だったのかと思いつつも、無事ついたので良しとする。

小等部は子供ばかりいる、小等部なのだから当然なのだが、こんなに大量の子供を見るのは生まれて初めてかもしれない。そのほとんどがオレを物珍しそうに見つめてくるのだから、落ち着かない事この上ない。

その中の一人をつかまえて、胡豆の居場所を聞くと、その子供は元気よく答えてくれた。

「胡豆なら運動場にいるぜ！」

どうやら胡豆は小等部の運動場にいるらしい。オレはお礼を言って早々に立ち去った、迂闊に長居すると子供たちに捉まりそうだったからだ。子供は嫌いじゃないが、今は急いでいる。子供たちのおもちゃになっている暇は無い。

暇は無い……のだが。

「兄ちゃん、次はオレたちのチームに入ってくれよ！」

「だーめ、お兄ちゃんは女子のチームに入るの！」

オレは見事に遊ばれていた。

運動場のような場所に連れていかれ、なぜかドッチボールをする事に。当然だがタイマンではない、チーム戦だ。やはり年上のオレがいるチームが勝つようで、負けたくない子供たちはこぞってオレを自分のチームに入れたがる。モテ期到来か？

やけにオレばかり狙われる試合を何回戦やっただろう、子供たちがとんでもない事を言い出した。

「お兄ちゃん対全員だー！」

オレはその言葉を宣言した子供にシロ君の影を見た。
ああ、非情かな。無論、オレに拒否権は無い。
「かかれー！」
そこにはルールなどと言うものは存在しなかった、コートすら存在しない。与えられるのは一方的な暴力、抵抗は許されない、子供相手にまともに抵抗できるはずがないだろう。子供を本気で撃退したら騎士の名が廃る……オレは騎士だからな、忘れんなよ！
……しばらく待ったが返事はない、心の中の住民に念押ししたつもりだったのだが、反応は無かった、珍しい。
前から後ろから、四方八方からボールが飛んでくる。一応まだボールを用いるというルールは残っているらしい、オレはひたすらボールを躱し続けていた。騎士になる試練の一つに、下半身埋められた状態で九本の槍を躱すってのがあるって言われて、凄い訓練をさせられた事のあるオレに、こんなボール当たる訳ないだろう。ちなみにその試練は実在しなかった、教官は教え子全員に嘘を教えていたらしい。
そんなオレの汗と血と少しの涙でできている回避率を目の当たりにしている子供たちは、ボールがちっとも当たらない事がつまらないのか、野次を飛ばし始めた。
「おにーちゃん、かわしてるばっかじゃん」
「あはははは－」
この回避率は半分優しさでできているんだよ！　とは流石に言わないでおく、残り半分が何かと聞かれた時に言えないしな、グロ過ぎる。
「へたれー」
「ヘタレー！」
回避率云々の説明を子供たちにする事はできない、しかしこちらはっきり言っておく。
飛んでくるボールの一つを掴み、すぐに投げ返しながら叫んだ。
「オレはヘタレじゃありません！」

当たった子供はギャーと言って尻もちをついた、もちろん手加減してるから怪我はしてないはずだ。ちょっと痛かったかもしれないが、人の事をヘタレ呼ばわりした罰だ。オレは断じてヘタレじゃない！

そしてオレは飛んできたボールを再び掴み、投げ返しながら宣言した。

「テメェら覚悟しろよー！」

きゃー、という子供たちの楽しそうな悲鳴が、太陽が中天をすぎた空に響いていった。

「ハァ……ハァ……」

「おにーちゃん、またねー」

「おー……」

……ツカレタ。

元気スギルヨ、ミンナ。

子供たちとの熾烈な争いは長く続き、気づけば日は傾いていた。結構本気だったドッチボールはオレの負けに終わり、次にやらされた鬼ごっこも、子供たちを全員捕まえるまでには至らなかった。ケードロだの缶蹴りだの、オレの知らない遊びもあったが、全部やらされた。

……うん、見事に踊らされてしまった。

茜色に染まる運動場、あんなに賑やかだったのが嘘のようだ、もうオレ以外誰もいない。どこか荒野にも似た雰囲気を漂わせる運動場に、オレの物ではない、既に聞き慣れてしまった声が響いた。

“へたれー”

うん、もう慣れた。

（なんだよ、ずっと黙ってたと思ったら開口一番に人の事罵りやがって）

“へたれー”

（ヘタレじゃねぇ）
まったく、こいつはどれだけ人をヘタレと決めつければ気が済むのか。子供たちにまでヘタレと言われたんだよな、オレはやる時はやるんだぞ。
人の訂正を聞かないまま、神は話を進めた。
“あのさー、お前がとても愉快に子供たちのオモチャになっている間にさぁ”
（その言い方はムカつくからやめろ。で、なんかあったのか？）
“……胡豆君、帰っちゃったよ？”
（……え？）
嫌な沈黙が場を支配する、神が頭を掻いているような音と、乾いた笑い声が聞こえた。
“いやぁー、お前が非常に面白く児童たちの玩具になっている間にさぁ”
（表現変えれば良いと思ってるんじゃねえよ。つーかどういう訳だ、何があった！）
“いやさー、お前がいとおかしく童らの遊具になりはべる間ね、胡豆君ずっと野球やってた訳よ”
（お前、それでずっと静かだったのか）
“うん、そうだよ。お前が遊んでいるのを横目に試合を観戦してたんだけどね、もうずいぶん前に試合終わっちまった訳よ”
（教えろよ！）
オレの叱咤に、神は少し罰が悪そうな笑い声を立てた。あれ、珍しく反省してる？
“言おうかと思ったんだけど……思ったんだけど”
珍しい、神がちゅうちょしている。うめき声ばかりでなかなか言葉を発しない。神は聞き取りづらい小さな声で、ぼそぼそと言った。
“クーガが珍しく、普通に楽しそうだったからさ、うん、なんというかね、そのね、あのね”
それ以降、神の言葉はまともな言葉になっていなかった。しかし、

言いたい事はその一言で理解できた。困っているような、照れているような、そんな声音で何か言わなくてはと焦っている。ひょっとすると、いつものようにごまかす方法を考えているのかもしれない。

……ったく、怒るに怒れないじゃないか。

（次、どっち行くんだ？）

“え？”

いつもはこっちが混乱させられているので、逆の立場になると少し小気味好い。

（日も暮れてきたし、さっさと案内してくれ）

“えええっと、神ナビ”

（いちいち口上述べんでよろしい）

“とりあえず右の方にある校門まで行って！”

そう言った神の声がやけに嬉しそうだったから、オレは苦笑を浮かべつつ、何も言わない事にしておいた。

10

誰も見ていない事を良い事にして、オレは地に伏していた。
施錠された初等部の門の前で。

「そうだよな、小等部が下校してるなら、初等部はもっと早くに下校してもおかしくないもんな」
“うん、そうだね”
「五男はもう帰っちまった、と」
“うん、そうだね”
「ここまで来たのは無駄足だった訳だ」
“うん、そうだね”
「『うん、そうだね』以外の事を言えよ！」
“肯定しか出来ねぇのに無茶言うなよ……”
神に無茶言うなと言われると非常に心外だ。
“失敬な”
神が何と言おうと、どうしようもない事に変わりは無い。初等部、いわゆる幼稚園がこんな時間までやっているはずが無い事をなぜ失念していたのか、自分の迂闊さが憎い。明るいパステルカラーで彩られた門は固く閉ざされ、人の来訪を拒んでいる、開けゴマと言ってこの門が開く訳がない。開いたところで五男はいない、もう帰ってるに決まってる。
五男がだめなら、あと残っているのは一人しかいない。
（最後は三男か、ちゃんと会えるのか？）
“私、不安になってきちゃった”
（奇遇だな、オレもだ）
何だかこのまま三男にも会えない気がしてきた。そうなったらどうしたらいいんだろう、届け物を届けられないし、そう言えばこの制服も返さないといけないんだった。何としてでも三男に会わない

と困った事態になる、カリパクはいけない、何とかしなくては。
“ここであれこれ言っててもしょうがないから動こうぜ”
（そうだな、動くか）
神の意見に賛同し、とりあえず歩く事にする。三男がいるのは中等部だ、ここからは結構距離がある。また神が“神ナビ起動”と言って道案内を始めた、心なしか声に元気が無い。そしてオレはもっと元気が無い。当たり前だ、これだけ市中引き回しみたいな事すればな、肉体的にも精神的にも疲れてきて当然だ。
二人ともここまで疲れたのは何時ぶりだろう。
そんな事を考えると、口から重いため息が出てきた。疲れていても立ちどまれない、動かなくては。まるで安住の地を追われたユダヤ人だ、そんな事を考えつつ、また足を動かした。

11

そんな感じでしばらく歩いていただろうか、オレが今歩いている校舎から校門へと向かう大通りで、下校する学生たちが帰路についている。オレとすれ違う学生たちは、友人たちと楽しそうに談笑し、時折たわむれのような喧嘩をしていた。横目でオレの姿を見るものもいるが、さして気に止めた様子もない、おそらく忘れ物を取りに戻っているように見えたのだろう。

周囲の流れにただ一人逆らいつつ、オレは昔の事を思い出していた。

オレにも、こうして学校に通っていた事があった。最も、この学校のように高度な教育を施す所ではなかったが、それでも学校なんてどこも似たり寄ったりだ。

友達とどうでもいい話をして、それなりに授業を受けて、ふざけて喧嘩したり、たまにマジになって喧嘩したり、仲直りできる時もあれば出来ない時もある。その中でたくさんの友達に囲まれている奴もいれば、少ない友達とすごく仲よくしてる奴もいる。そして今のオレのように一人の奴も珍しくない。

一人の奴……そう言えばあいつはいつも一人だった。友達とは言えないと思う、多分あいつに「オレたち友達」とか言ったら顔を真っ赤にし、銃剣を振り回して襲ってくるに違いない。まぁ一応オレのライバルを自称し命を狙って来てたはずなんだからな、あれでも。

あいつ、死んじまったんだよな。あいつだけじゃないか、もうみんな居ないんだ。オレのせいで。

……やべぇ、思い出したら泣きたくなってきた。

ぼんやりとした記憶が走馬灯のように脳裏をよぎる、過去をなぞるだけの虚しい行為。いい加減過ぎる王様、ずいぶん明るい吸血鬼、カッコつけてカッコ悪かったあいつ。いつの記憶かも解らない、赤い目の少女が花畑で笑顔を浮かべている光景が脳裏に浮かんだ時、

背後から声が聞こえた。

12

「もしもーし、そこの人ー、ちょっと待ってくださーい！」
その声でオレの意識は浮上した。いつの間にか足は止まっており、周囲の人が不振そうな目を向けてくる。いかん、ぼんやりし過ぎてた。
その声はだいぶ遠い所で発せられた声だった。誰の事を呼んでいるんだろう、少なくともオレじゃないだろう。オレがこっちで知り合った人なんて警備員とメガネと鬱野郎と子供たちしかいないんだからな、改めて考えると変な面子だ。もう誰とも再開する事は無いだろうと思うと、少しさみしい。
なんかオレさっきからずっと落ち込んでる、我ながらうざい奴だ。心の中で自虐しつつ足を動かそうとした時、また声が聞こえた。
「大学部で迷子になっていた久我さん、待ってくださーい！」
今度は結構近い所で聞こえた声に、オレは足を止めた。あいにく大学部で迷子になっていた久我さんには心当たりがありすぎる、オレ以外に誰が居ようか、いや居まい。
振り返ると、オレより五歳ぐらい年下と思われる少年が、傍らにあった茂みを飛び越えて現れた、かなり身軽だな。変な所から出てきたもんだから周囲の視線が痛いぞ、こいつは全然気にしてないようだがな。
おそらく今まで走っていただろうに、この少年息を全く乱していない。オレの軽い警戒心を解こうとするかのように少年はオレに笑顔を向けつつ、尋ねてきた。
「久我　朱彦……さん、ですよね？」
「そうだけど」
誰だろうか、なんか見覚えのあるような顔だけども。今オレが着てる制服と似たデザインの制服を着てる、確かこの制服は高校の制服だったから、こいつの着てるやつは中学の制服だろう。

「オレ、樒実　桃李って言います。実生兄ちゃんの弟です！」
「樒実　桃李……って、確かかくれんぼしてて、タンスから出られなくなったっていう、中一の三男」
「はい、そうです。タンスが開かなくなって困った三男です」
なるほど。何となく猫っぽいクリッとした目といい、このノリといい。樒実さんと纏う空気が同じだ、血の繋がりを感じさせる。本人の名乗る通り三男で間違いないだろう。
「よかったぁ、行き違いになったらどうしようかと思った。実生兄ちゃんから連絡きたんで、届け物を預かりに来ました」
「そりゃあわざわざ。ご足労、どうも」
いえいえ滅相もございません、と笑顔で返す三男。いえいえとても助かりました、とノリで相槌を返してしまったオレ。いや、実際助かったんだが、なんだこのノリ。
「それで、届け物ってなんですか？」
「ああ……これだよ」
年のわりに礼儀正しい奴だな、と好感を覚えつつ、オレはポケットから真っ赤な宝石を取り出して、それを差し出された手の上にぽとりと落とした。

そして、オレは自分の目を疑った。
何て事ない動作だったのに、何の変哲も無い光景だったはずなのに、ここまで自分の目を疑ったのは初めてだろう。
ほんの一瞬の出来事だった。シロ君から託された赤い小石、無造作に彼の手に落とされたそれは、次の瞬間には彼の手の上に無かった。
いや、消えたのだ。
オレの見間違いでなければ、一彼の手の内に消えていった《・・・・・・・・・・・・》。
目を見張ったオレをよそに、彼はにっこり微笑むと言った。

「確かに受け取りました」
「え……？」
「それじゃ、友達待たせてるので」
さようならと言う言葉だけ残し、訳が解らないオレを置いて、彼は踵を返した。
「あ、そうだ」
はたと呟き、進めかけた足を止め、彼は一度だけ振り返った。
その笑顔が何かとダブる。
彼は言った、
『ありがとう』　と。

13

オレは茫然としたまま彼の背中を見送り、立ち尽くしていた。数拍の間を置いてから、正直な感想が口をついて出た。

「……なんだ今のは」

“……なんだろう？”

（お前にも解んねぇのかよ）

“わかんねぇ”

本当に何だったのだろうか、現れたと思ったらすぐに消えた、夢か幻かと本気で疑いかける、しかし手元にあったはずのあの石は既に無く、それが先ほどの出来事は現実だと示していた。

“なぁ、さっき何とダブったんだ？”

ダブる？

そう言えば、別れ際に彼の笑顔が誰かとダブって見えたんだった。誰だろう、そう昔に見た顔ではない、最近であった奴だ。彼の兄とダブった訳じゃない、もうちょっと前に出会った奴だ、そうその直前あたりで。

“警備員さん？”

（違う、似てないから！）

警備員じゃなくて、さらにその前あたりに会った人で、彼に似てる人。

えーっと、えー……っと……

「あ」

“思い出せたのか？”

（ああ、どこかで見た顔だと思ったんだよ……どこで見たのか、やっと思い出せた）

思い出されるのは、彼と同じ眩しい笑顔。顔の造形はよく思い出せないが、纏う空気と言うか何と言うか、本質的な何かが、彼と本当によく似ていたのだ。

今はもう手元にないあの小石、彼の目とよく似たあの小石を半ば押し付けるように託してきた彼。
（あいつ、シロ君によく似てる）

しばらく間を置いてから、神がぽつりと呟いた。
“似ているから、何なんだ？”
（こっちのセリフだ、なんでシロ君と樒実三男が似てるんだよ？）
“樒実三男ってお前、サラリと酷いな……。他人の空似じゃねぇの？”
（いいや、絶対なんかある。お前なんか隠してんじゃねぇのか！？）
“私の情報網は意外と狭いんだよ、一点から線飛ばす事しか出来ないんだよ！”
（訳わかんねぇから！）
結論は出ないまま言い争いは終わった。実際に声を出していた訳でもないのに、やけに疲労を感じる、気づけば呼吸が荒くなっていた。呼吸を整えていたら、神が指摘をしてきた。
“ところでクーガさん、そろそろ周囲の視線が痛いですよ？”
周囲を見回すと、何人かと目が合った。そういやオレ、神と言い争ってる間ずっと動かないで居たんだよな、道のど真ん中で。
（あ……うん、動くか）
少し恥ずかしくなってきたオレは、早歩きでその場を立ち去った。いち早くその場を立ち去ろうとするオレに、神がさらなる指摘を加えてきた。
“ついでにクーガさん、制服返し忘れてますよ？”
立ちどまり、自分の体を見下ろす。自身の体を包むのは緑色のブレザー、借り物の制服。
「……忘れてたーっ！！」
思わず叫んだオレに対する周囲の視線は、大層痛かった。

１３（後書き）

今度投稿できるのはいつでしょうか、ははは、忙しすぎる。リア充とは断じて名乗れないのに、何だこの忙しさは。早く冬カムヒア！

と言ってやってきた冬、章機能を使って目次をすっきりさせました。ふふふ、まだ忙しい。すみません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7302h/

戦闘士クーガ

2011年6月24日18時13分発行